



fig. 304 調査区平面図



fig. 305 調査区全景

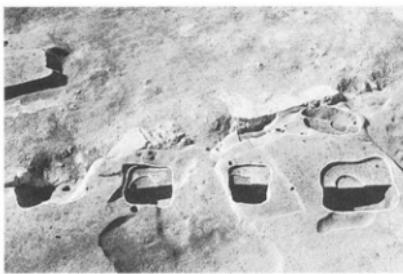


fig. 306 SB01



fig. 307 SB02

検出遺構

検出した遺構は、掘立柱建物 3 棟、井戸 2 基、溝 9 条、土坑 7 基、浅い落ち込み 4 基の他、ピット 45 基と谷状地形を検出したが、すべて同一面で検出したため遺構の所属時期に応じた遺構番号は付けられていない。

ここでは、主な遺構について報告する。

S B01

調査区のはば中央で検出した総柱の掘立柱建物である。西側は建物の基礎で破壊されており、柱間は南北方向は 3 間分、東西方向は 1 間分しか確認できなかった。掘形の深さは約 50cm で、柱根は總て抜き取られていた。建物の方向は国土座標の北から 16° 西に振っている。東側柱列の北端と北から 3 番目の柱穴は他の柱穴と比較して大きいため、これらが建物の隅柱になると推定できる。出土遺物から奈良時代後期頃の建物と思われる。

S B02

調査区の南東隅で検出した掘立柱建物である。建物の西端のみ確認できたが、大部分は調査区外に続いている。柱間は南北方向で 2 間分を確認したが、調査区内にはさらに続く

掘形は存在しないため、建物の西側妻部分に相当する。掘形の深さは70~100cmで、柱根は北側と南側の柱穴は抜き取られていたが、中央の柱穴は遺存していた。柱根の表面には手斧で成形した痕跡が明瞭に遺存しており、柱の直径は20cmである。建物の方向は国土座標の北から24°西に振っている。出土遺物からこれも奈良時代後期頃の建物と思われる。

S B03 調査区の南西寄で検出した掘立柱建物である。南北方向の柱間は2間であるが、東端は建物の基礎で破壊されていたため、東西方向の柱間は2間分しか確認できなかった。しかし破壊された部分を越えて東へは続いているため、2間あるいは3間の建物であったと推定できる。掘形の深さは20~30cmで、柱痕跡の不明瞭な柱穴もあった。南側柱列の西から2番目の柱穴には、柱の根固めに使用した可能性のある人頭大の石が据えてあった。建物の方向は国土座標の北から32°西に振っている。柱穴の位置から判断して、2間×2間の建物ならば井戸S E01に先行する建物となり、2間×3間の建物ならば井戸S E01の覆屋の可能性がある。出土遺物からこれも奈良時代後期頃の建物と思われる。

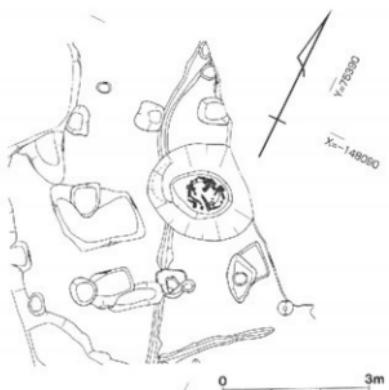


fig. 308 S B03平面図



fig. 309 S B03

S E01 調査区の南西寄で検出した井戸であるが、北東端は擾乱で破壊されている。掘形は長径2.2m以上、短径2.0mの楕円形で、深さは1.1mである。掘形の底部中央に井戸枠があり、現状で長径約60cm、短径約40cm、高さ約20cmの曲物を上段に、直径約40cm、高さ約25cmの曲物を下段に据え、さらにその上部の周囲を最大遺存長約50cmの板材と杭で円形に囲んでいた。しかし板材は遺存状態が悪く、堅板に組んでいたと推定できる程度ではほとんど崩壊していた。上段の曲物も元米楕円形であったのか、土圧で歪んでいるのか不明である。井戸枠より上部の埋土は上から淡褐色粘質土・淡褐色砂・淡灰褐色砂混じりシルト・淡灰色砂混じり粘土、枠内の埋土は灰色重粘土、枠外側の裏込土は暗灰褐色砂混じり粘土・青灰色砂混じり粘土で、湧水層は灰色粗砂である。掘立柱建物S B03はこの井戸の覆屋の可能性がある。出土遺物からこれも奈良時代後期頃の井戸と思われる。

S E02 調査区北西端の擾乱の底で検出した井戸で、掘形は直径約1mの不整円形で、深さは2.1mである。井戸枠は最下部に幅10~30cm、長さ80cm、厚さ2cmの板材13枚を上下2ヶ

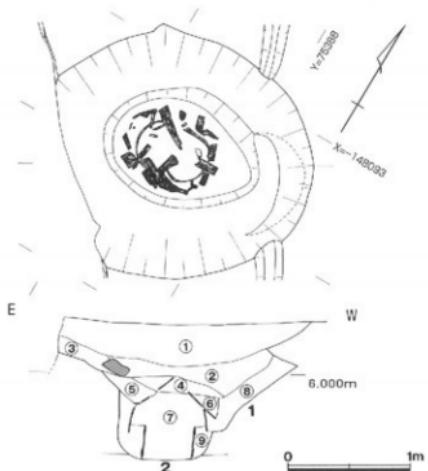


fig. 310 SE 01平面図・断面図

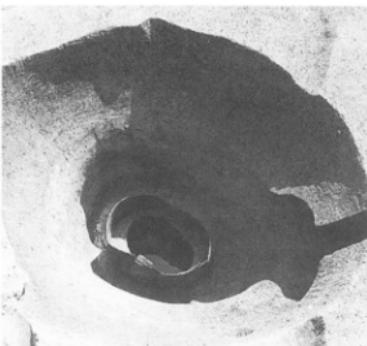


fig. 311 SE 01

- | | |
|----------------|---------------|
| 1. 淡青褐色シルト | ⑥. 灰色砂混じり粘土 |
| 2. 灰色砂（湧水層） | ⑦. 灰色重粘土 |
| ①. 淡褐色粘質土 | ⑧. 鮎形褐色砂混じり粘土 |
| ②. 淡灰褐色砂混じりシルト | ⑨. 青灰色砂混じり粘土 |
| ③. 淡褐色砂 | |
| ④. 淡灰色砂混じり粘土 | |
| ⑤. 淡灰色砂混じり粘土 | |

所で桶状に籠で固定したものを据えた後、その上部外側に最下段の半分が重なる状態で、幅19cm、高さ22cm、厚さ3cmの井戸瓦を1段あたり10枚で6段積み上げていた。井戸瓦の外面に上下2条の糸紐の痕跡があったため、あらかじめ井戸瓦10枚を糸紐で縛り、それを積み上げていったと推定できる。桶内の埋土の大半は暗灰色微砂で、底近くにのみ灰色砂があり、桶外側の裏込土は掘削した基盤層が小塊状に混合したもので、湧水層は黒色砂質土である。桶内から明治13年の半錢硬貨が出土したため、井戸の放棄はそれ以降となるが、使用期間を考慮すると掘削は江戸時代に遡る可能性が高い。

谷状地形 調査区南端で検出した谷状の地形で、北端はS D09が急に幅を広げる状態で始まり、南端は調査区外に続いている。平面の形状は三角形に近く、外形は比較的直線であるが底面は起伏に富んでいる。規模は長さ7.2m以上、最大幅6.9m、深さは0.6mである。埋土は4層に大別できる。底面に近い位置から出土した土器から、埋まった時期は平安時代頃と考えられるが、谷状地形が実在していた時には隣に掘立柱建物S B01~03、井戸SE 01が存在していた可能性がある。

3. まとめ 御蔵遺跡は調査例が少ないため、遺跡の実態が今までよく判っていなかった。今回奈良時代の比較的大きな掘立柱建物を確認したことから、通常の集落ではなく公的な性格を有する遺跡である可能性が出てきた。今回の調査では旧八部郡関連の施設であると直ちに判断できる成果は得られていないが、苅藻川自然堤防の後背地という、必ずしも良くない遺跡立地にもかかわらず集落を営んでいることや、御蔵という地名の存在もその傍証となり、北側至近地を通る山陽道との関連性も視野に入れた考察が今後必要となろう。

また古墳時代の前期と後期の遺構を確認したことから、未知の集落が周辺に存在する可能性が高い。そして遺構は今回確認できなかったが、弥生時代の遺物包含層を確認したことから、当時の遺構が近くに存在する可能性も考えられる。

42 御藏跡 第3次調査

1. はじめに

御蔵遺跡は、これまで様相が不明であったが、今年度の調査（第2次）で8世紀後半と6世紀後半の遺構面が確認され、特に8世紀後半の遺構面からは、大型の方形の掘形を持つ楕円柱建物4棟、井戸等が検出され、当時期の集落の存在が明らかになった。



2. 調査の概要

今回の調査は、(仮称)市営御苔西第2住宅建設事業に伴い実施したもので、基礎工事当により影響を受ける箇所について調査を実施した。

第1講捲面

現地表下50cmで第1遺構面が検出された。現代の耕作土により削平を受けており、古墳時代後期から奈良時代後半の遺構が同一面で検出された。掘立柱建物、溝数状、土坑等が検出された。遺物が未整理であるため、遺構の時期が不明瞭なものがある。平瓦が10数点検出された事が特記される。

据立柱建物群 現在の時点で、11棟の建物が想定される。

S B101 2間×3間以上の掘立柱建物である。方形の柱掘形を持つ。

S B102 1間以上×2間の掘立柱建物である。

S B103 2間×3間の掘立柱建物である。方形の柱掘形を持つ。

SB104 2間以上×4間の掘立柱建物である。

S B105 1間以上×2間以上の掘立柱建物である。方形の柱掘形を持つ。

S B106 2間以上×4間の掘立柱建物である。

- S B107 1間以上×3間の掘立柱建物である。
- S B108 3間×3間以上の掘立柱建物である。
- S B109 2間×3間の掘立柱建物である。
- S B110 1間以上×2間以上の掘立柱建物である。
- S B111 2間×1間以上の掘立柱建物である。

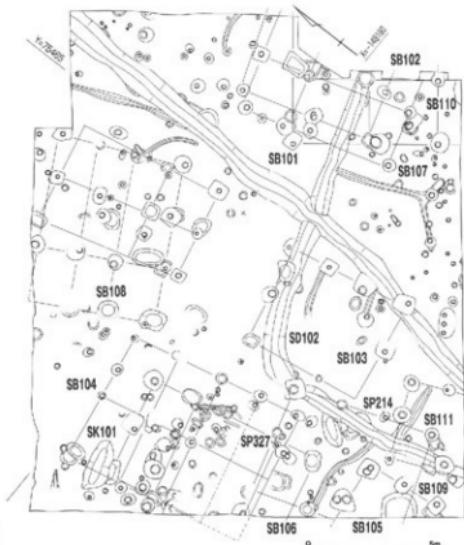


fig. 313 第1造構面平面図



fig. 314
第1造構面全景

棟方向の同一性を見ると、3つのグループに分けることができる。

- ① S B101・103・105 (8~9 C) S B102・104・106・107 (6 C?)
- ② S B108・109・111 (6 C?)
- ③ S B110 (6 C?)

切り合い関係から見ると①⇒②⇒③の順に新しいと考えられるが、建物の重複があり遺物の整理作業の進捗を待って建物の共存関係を確定したい。

溝状遺構

明確な2条の溝の他に、幅10cm程度の細い溝が数条検出された。

S D101

南北方向に流れる溝である。幅約60cm、深さ約50cmの規模である。断面形はV字形である。8世紀末には埋没している。

S D102

S D101と交差し、交差地点から西で南に折れ曲がる溝である。幅60cm、深さ20cmの規模である。S D101の切り合いは確認されず、前後関係は明確ではないが、同時期に存在したと考えられる。

土坑

土坑数基検出されたが、遺物を包含する物は少ない。

S K101

長径220cm、短径100cm、深さ35cmの不定型の土坑である。8世紀末の遺構で、土師類と共に、獸骨が出土した。

第2遺構面

自然流路と土坑が数基検出された。

S D102

南端部で幅7m、深さ2mの規模である。大規模な洪水で埋没しており、埋土から、縄文時代晩期から弥生時代の土器片が数点出土した。著しく磨滅を受けている。

S K201

長径35cm、短径30cm、深さ20cmの不定型の土坑である。埋土からサヌカイト剥片が多く出土した。製品は含まれていない。

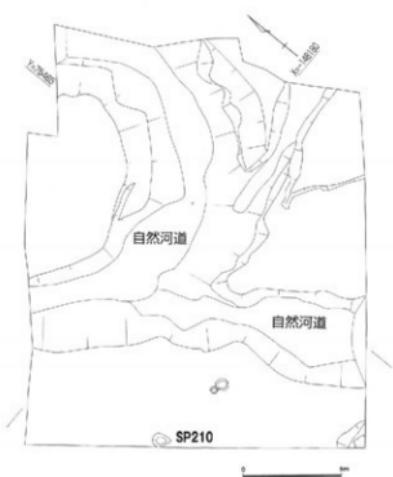


fig. 315 第2遺構面平面図



fig. 316 第2遺構面全景

3. ま と め 古墳時代以前の状況は不明瞭であるが、ベース層及び自然河道の堆積状況からも、不安定な土地であったようで、居住域には適さないと考えられる。古墳時代後期以降、現在に至るまで大きな堆積土の流入は無く、居住域または、生産域として利用されている。

古墳時代後期から奈良時代後半、平安時代前半にかけて遺構の密度は高い。方形の堀形を持ち、棟方向を同じくする総柱の建物は、倉庫群と考えられる。少数であるが、瓦が検出されていることからも、有力者の住居、あるいは寺院、役所的な施設である可能性が高い。周辺の遺跡で調査地周辺の地形は、北東から南西へ標高が高くなっている、第2次調査地点でも同様な様相が見られることから、第2次、第3次調査地点の西側に遺跡は広がると考えられる。



fig. 317 御藏遺跡遠景

まつ の 43. 松野遺跡 第5-II・6-I次調査

1. はじめに

松野遺跡は、昭和56年に市営松野住宅建設に伴い試掘調査が行われ、弥生時代前期の土器片が発見されたのを契機に発掘調査が実施された。調査は、同事業地内において第3次調査まで実施された。調査の結果、古墳時代中期末から古墳時代後期初頭にかけての整然と配置された掘立柱建物群とそれを囲む柵列が検出され、当時の有力者の館跡と考えられた。この遺跡は、六甲山系から流れだした妙法寺川や茹藻川などの河川によって形成された、扇状地性低地の中の南北方向の微高地上に立地している。今回の調査地は、市営松野住宅から南方約80m、現在の海岸線から約900m内陸の標高6~7m前後の地点である。



fig. 318
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要 5次-II調査

基本層序は現代盛土・旧耕土・褐色泥砂・灰褐色泥砂・茶褐色泥砂・黄褐色泥砂となる。遺物包含層は、0.1~0.2mの厚みをもつ遺構面を覆っている。遺構面全体は、南東方向に緩やかに傾斜する遺構面である。しかしながら、現代の建物の基礎等による搅乱を受け、遺構面が損なわれている部分が多い。遺構面は1面であったが、遺構の時期は鎌倉時代前半と古墳時代後期初頭の2時期が存在した。

鎌倉時代前半 鎌倉時代前半(13世紀)の遺構としては、掘立柱建物(SB2003)1棟が検出された。の遺構 3×3間以上で、総柱建物で東側へひろがるものと考えられる。柱間距離2.2mである。建物の時期については、柱穴より出土した遺物より、鎌倉時代前半頃と考えられる。後述するが、古墳時代の建物の柱穴の規模は、直径0.4~0.6mと大きい。これに比べて、いま述べた中世の柱穴の規模は、直径0.2~0.3mと小さい。古墳時代と中世の柱穴内の土には差異はあまりなく、時代の区別は柱穴の規模から判断されるようである。特にSB2003付近に散在する直径0.2~0.3mの小さい規模の柱穴も中世と考えられる。出土遺物のない柱穴でも、柱穴の大小から時期が判断できそうである。

鎌倉時代前半として時期の明確な遺構は、いま述べたものにとどまる。

古墳時代後期 古墳時代後期（6世紀初頭）の遺構は、井戸状遺構1基・溝状遺構6条・掘立柱建物3棟・竪穴住居址1棟・土坑4基・落ち込み状遺構3基・ピットが検出された。

S E 2001は、調査区北西部で検出された井戸状遺構である。直径が1.3m、深さは検出面より1.4mの規模である。土師器碗・甕・甌・小型壺・須恵器坏身・坏蓋・有蓋高杯・木片などが堆積土の中間あたりでまとまって出土した。また井戸内堆積土を水洗いした結果、土師器片・須恵器片と白玉が計30個検出された。

白玉を大きさで分けると、直径7mm 2個・4～5mm 28個の2種で直径7mmのものは表面に仕上げがされず未製品である。高さで分けると5mm 2個・4mm 7個・3mm 14個・2mm 6個・1mm 1個である。色調では、濃緑色24個・緑灰色5個・銀灰色1個である。形状では、未製品2個を除き、算盤形はなく、臼形1個・偏平形7個・台形20個（臼形の崩れたものも含む）である。

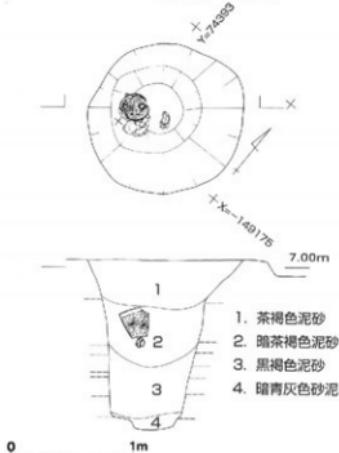


fig. 319 S E 2001平面図・断面図



fig. 320 S E 2001



fig. 321 S B 2001



fig. 322 S B 2002

臼玉の材料の違いから、少なくとも複数の箇所の供給地から持ち込まれたことがわかる。また未製品の存在から完成品を持ち込まれたのではなく持ち込まれた材料を使用する際に加工をおこなったと考えられる。

S D2001は、調査区南西部で検出された、緩やかなS字状に蛇行する幅0.3~0.4m・深さ0.4mの溝状遺構がある。溝の断面は逆台形で、幅に比べて深く掘られた溝である。須恵器壺蓋・土師器碗などが出土した。

S D2004は北西部は搅乱されているが、幅0.6m・深さ0.1mの溝状遺構で、一辺約5mでロの字状に巡るものと推定される。一巡する溝の内側に、直径0.3m程の規模の柱穴と考えられるピットが3ヶ所検出された。検出状況からは大壁造り建物のようにも考えられるが、溝内にピットではなく、溝は浅くまた溝内の堆積土も壁を構築したような状態ではない。遺構の性格について積極的に言える材料が乏しい。

掘立柱建物3棟の規模等について羅列して述べる。3棟の建物はすべて総柱建物であると考えられる。S B2001 3×2間以上、調査区西側に広がるものと考えられる。柱穴規模は他の2棟に比べて大きく、特に東側柱穴については直径0.7~0.9m・深さ0.5~0.6mのものである。東西柱間2.0m・南北柱間1.6mである。

S B2002は、2×2間、桁行柱間1.5m・梁行柱間1.2mである。S B2004は2×3間、桁行柱間1.6m・梁行柱間1.8mである。

S B2005は、竪穴住居址で遺構の大部分は現代の搅乱によって、損なわれている。南東隅部と西邊の一部が検出されたに過ぎず、住居址の深さも0.05mほどの残存状況である。復元される一辺は約4.0mである。



fig. 323 5-I 区遺構面平面図

6次-I 調査 基本層序は、北壁断面実測図に示すように現代盛土・灰色泥砂・黄褐色砂泥・黄灰色泥砂・茶褐色泥砂・淡褐色泥砂となる。

遺構面は、1面として検出したが遺構の時期は、鎌倉時代前半と古墳時代後期初頭の2時期が存在した。

調査の概要 古墳時代の遺構の堆積土は基本的に茶褐色で、中世の遺構とはこれによって区別した。

鎌倉時代前半 遺構は、井戸状遺構4基・溝状遺構・ピットなどが検出された。

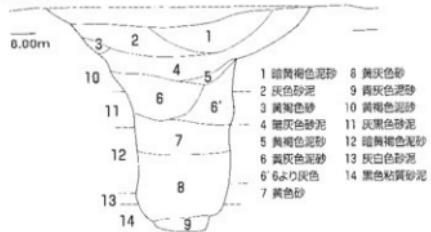
の遺構 S E1001は、調査区南部で検出された井戸状遺構である。平面形は整円ではなく、長径2.1m・短径1.8m・深さ1.2mの規模で、断面形は緩やかなV字形である。またS E1001の西側でS E1001に切られるS D1002が検出された。幅約0.3m・深さ0.1mの規模で、微量の土師器・須恵器が出土した。中世の時期に属する遺構と考えられる。

S E1002は、調査区南東部で検出された井戸状遺構である。平面形は卵形で、長径2.2m・短径2.0m・深さ1.8mの規模で、断面形は喇叭形を呈す。微量の土師器・陶器が出土した。

S E1003は、調査区北西部で検出された井戸状遺構である。検出面は攪乱坑などによって損なわれているが、直径1.1m程の円形であると推定される。深さ1.2mで断面形はV字形である。遺物は堆積層のはば中間から、土師器皿2・瓦器皿2・須恵器碗1・土師器羽釜片1・箸2・木片・昆虫の羽などが出土した。また同様の層位から赤と白と暗灰色のチャートの拳大からこれよりやや大きな石が出土した。井戸を埋め戻す際のまじないに使用した遺物であろうか。出土土器から13世紀頃に埋め戻された井戸と考えられる。

S E1004は、調査区北西部で検出された井戸状遺構である。直径約1.2m・深さ0.8mの規模で、断面形はV字形である。微量の土師器・須恵器が出土した。S E1001・02・04の堆積土は、断面観察から周囲の土がブロック状に入っている。比較的短期間の使用の後、埋め戻されてしまったのであろうか。これに比べS E1003の堆積土は均質な土層となり、一定の期間の使用と埋め戻しの儀礼が存在する。

SE1002



SE1001

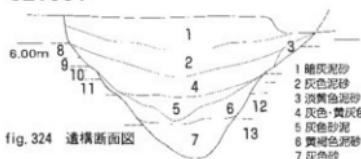
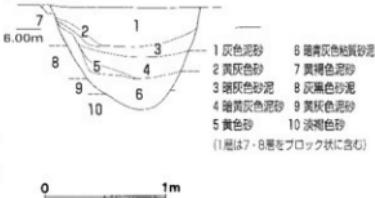


fig. 324 遺構断面図

SE1004



SE1005





fig. 325

6 - I 区遺構面全景

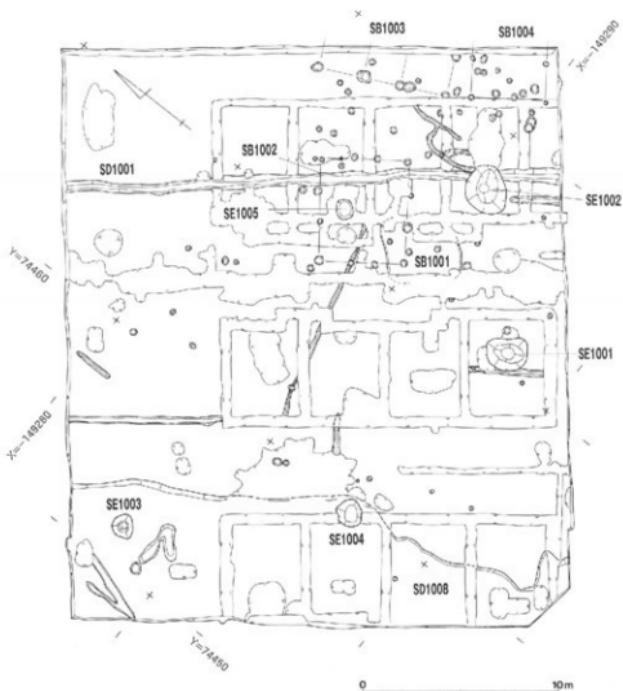


fig. 326

6 - I 区遺構面平面図

古墳時代後期 古墳時代後期の遺構は、竪穴住居址1棟・掘立柱建物3棟・井戸状遺構1基・溝状遺構の遺構 7条・ピットなどが検出された。

S B1001は、調査区南東部で検出された竪穴住居址と考えられる遺構である。現代の建物の基礎などによって搅乱を受け、規模は不明である。遺構の残された部分から、1辺約4.0m前後の橢円方形の住居址であろう。深さは約0.1m程度残り、周壁溝はない。P1040・1050は浅いが住居址の柱穴と考えられ、復元すれば4本柱かと考えられる。床面からやや浮いた状態で、土師器壺・須恵器壺身が出土した。炭化材も床面からやや浮いた状態で検出された。検出状況から垂木と考られる。炭化材そのものの残存状況も決して良好とはいえない。なお6次調査までにおいて焼失住居の検出は初めてである。

掘立柱建物（S B1002）は、3間×3間で南北柱間1.3m・1.5m・東西柱間1.6m・1.8mの側柱建物である。建物の時期は、S B1001より新しくP1039からの須恵器壺身から6世紀中頃まで時期は下るようである。

掘立柱建物（S B1003）は、3間×1間以上の調査区外に伸びる建物である。南北柱間2.1m・東西柱間2.0mである。

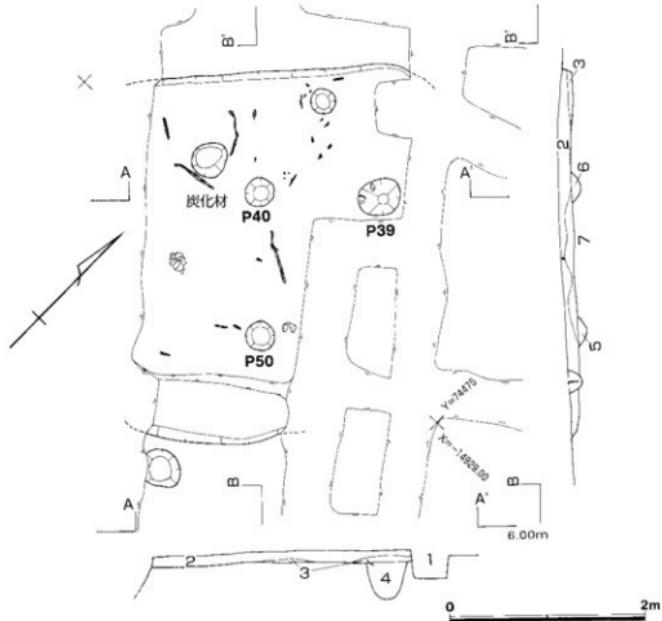
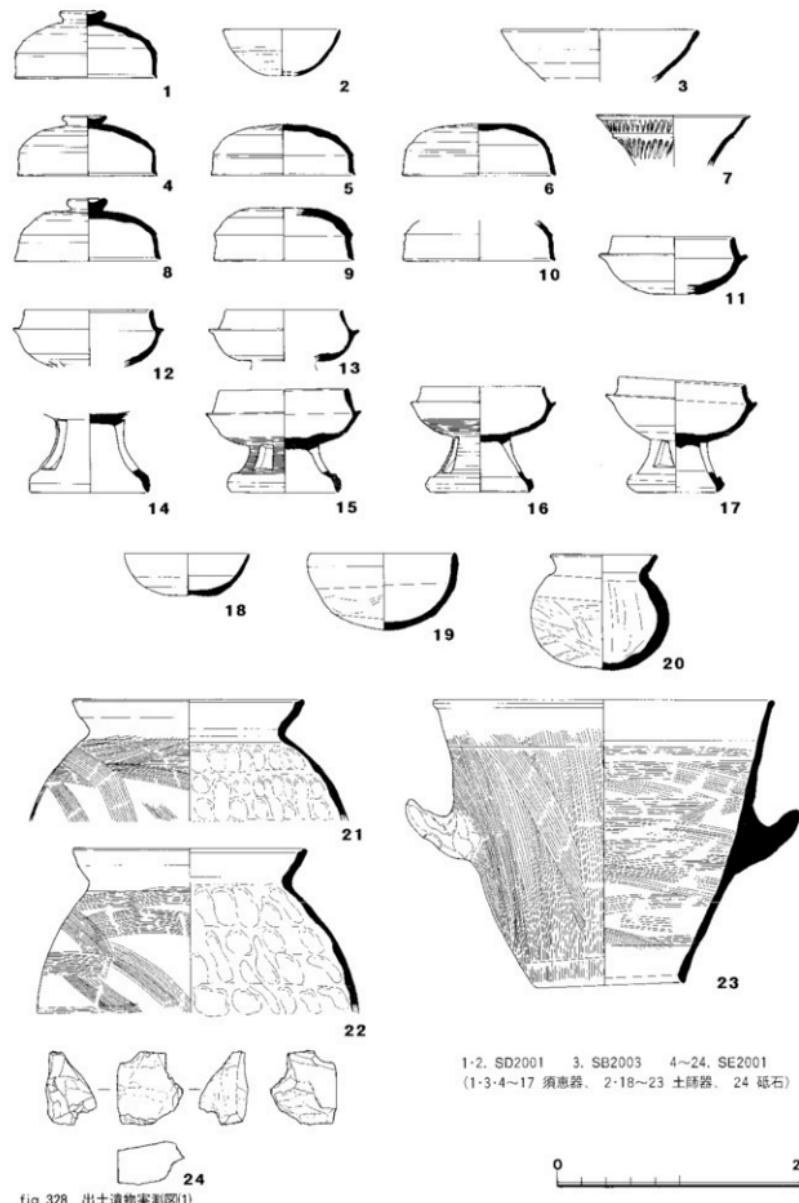


fig. 327
S B1001平面図・断面図

1. 搅乱
2. 茶褐色泥砂（炭含む）
3. 褐色泥砂
4. 茶褐色混練泥砂（P1059）
5. 淡茶褐色泥砂（P1050）
6. 茶褐色泥砂（P1040）
7. 細黄褐色泥砂（小礫を含む）



掘立柱建物（SB1004）も、2間×1間以上の調査区外に伸びる建物である。南北柱間2.1m・東西柱間2.0mである。

SE1005は、調査区西部中央で検出された井戸状遺構である。直径約0.8m・検出面からの深さ1.1mの素掘りの井戸である。断面はU字形で、微量の須恵器が出土した。

SD1001は、調査区北辺から南辺に一直線に走る溝状遺構である。幅約0.6m深さ0.3～0.4mの規模をもつ。一直線に走ることから何らかの区画溝ということも考えられる。少量の土師器片・須恵器环・甕などが出土した。

ピットは調査区に散在的に検出されたが、その多くは東南部に集中している。その他検出されたピットは散在的で、建物などにまとまるものはないようである

3. まとめ 今回の調査では、前年度（第4次調査）に統いて鎌倉時代前半と古墳時代後期の集落址が検出された。また第6次調査によって遺跡が南へのひろがりをもつことが確認された。

今回検出された中世の建物が、集落のなかでどのような位置をしめるのか。また第6次調査での井戸の使用方法や埋め戻しの儀礼について、今後検討すべき課題がある。

古墳時代後期の遺構としては、第1～3次調査で発見された槽で囲まれた掘立柱建物群の周辺の集落を第4～6次調査によって確認することができた。

今回検出された掘立柱建物は、建物の方向や重複関係から第4次調査も含めて2～3時期の時期差があると考えられる。また第4次調査でいう区画溝の北側に堅穴住居址が存在する点は、SB2005の検出地点からも追認されるようである。

以上のことから古墳時代後期における松野遺跡の集落内の建物構成を知る上で貴重な資料を得ることができた。

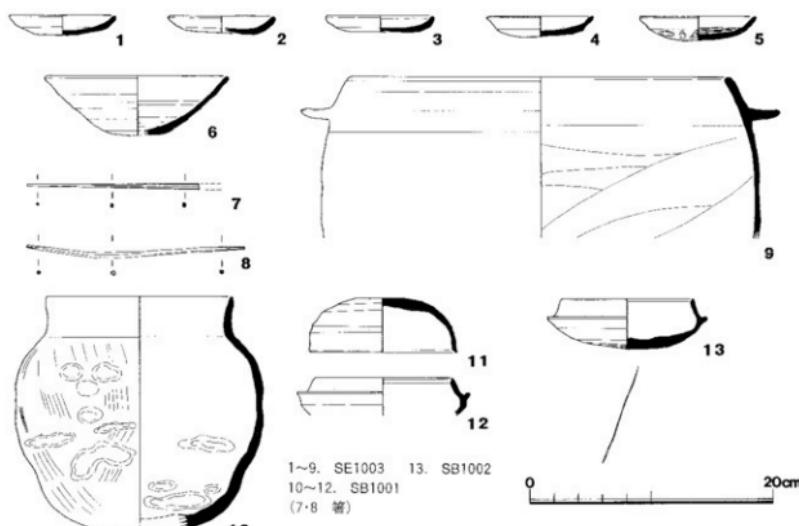


fig. 329 出土遺物実測図(2)

44. 三番町遺跡 第8次調査

1. はじめに

三番町遺跡は、昭和62年度～63年度の発掘調査で、遺跡の存在が確認された。苅藻川によって形成された標高約4.5～7.0mの扇状地に立地し、今回の調査地付近の標高は約6mを測る。



fig. 330
調査地位図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の第8次調査は、梅ヶ香線街路築造工事に伴うもので、道路部分について全面調査を実施した。調査区は北側からⅢ区・Ⅰ区・Ⅱ区と設定した。

基本層序

地表面下から、盛土・旧耕土層・灰褐色中砂層・淡灰褐色細砂層・暗灰褐色細砂混じりシルト層・暗褐色シルト層（中世水田耕土・古墳時代遺物包含層）、黄茶褐色シルト層となる。このうち暗褐色シルト層上面と黄茶褐色シルト層上面で遺構を検出した。

I 区

第1遺構面

この調査区は、中世と古墳時代の遺構面を確認した。

この遺構面では、中世の溝1条、水田・畦畔状遺構、ピットを検出した。

S D01は、調査区の西端で検出された南北にのびる溝で、幅70～80cm、深さ15～25cmを測る。溝内からは、牛馬の足跡が無数に検出され、獸骨が点々と散在し出土した。出土遺物は、13～14世紀頃の須恵器・土師器が出土している。また、溝の東隣には幅120～150cmの畦畔状遺構があり、そのうち高さ10cm程の高まりと70～80cmの幅で人や牛馬の足跡の痕跡が全体にわたって確認された。

第2遺構面

この遺構面では、古墳時代の溝8条、土坑3基、不明遺構1基、ピット多数を検出した。

S K01・03は、調査区の北側で検出された円形の土坑で、いずれも幅60～65cm、深さ10cmを測る比較的浅いものである。

S K02は、調査区の北側で検出された梢円形の土坑で、長径80cm、短径75cm、深さ40cmを測る。内壁が急な傾斜を持ち底はやや平たく底からは土師器片が出土し、5世紀前半頃と思われる。

S D03は、調査区の北から南方向にかけて流れていた溝で、幅70~80cm、深さ20cmを測る。埋土である黒褐色粘性砂質土からは、古墳時代後期の須恵器・土師器が出土した。

S D04・05は、いずれもS D03から派生した溝であり、S D04は、幅40~50cm、深さ12cmを測り・S D05は、幅40cm、深さ10cmを測る。埋土も酷似していて古墳時代後期の土器が出土している。

遺物の出土が一部の遺構のみで、各遺構の時期を判断するのは極めて困難ではあるが、いずれも埋土が酷似した黒色系シルトであることから、古墳時代中期～後期頃を中心とした時期であると考えておきたい。

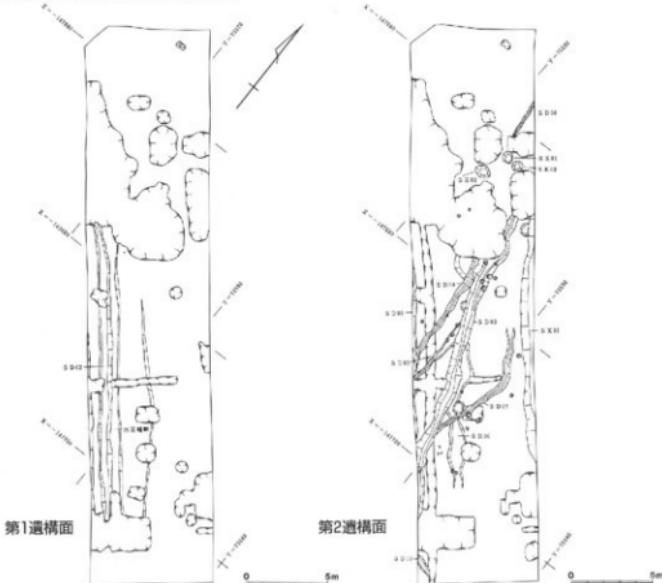


fig. 331
I 区遺構面平面図



fig. 332
I 区第2遺構面全景

II 区 I区の南側の調査区で、中世の遺構面1面のみであった。検出された遺構は、水田、溝1条、不明遺構1基、井戸1基、ピットである。

S D01は、I区で検出された溝の延長になり、S D02と同様に溝の中には、獸骨片が点在していた。また、溝の東側には、畦畔状遺構と無数の足跡痕が検出された。

調査区の南側で検出されたS X01は、南北長5.5m、東西長2.3m、最深部1mを測るが、遺構の西側が調査区外に出るため全体規模については判らない。最終埋土である淡茶褐色粗砂からは頭部を含む獸骨がまとめて出土している。

ただし、この獸骨については、S X01がほぼ埋まりきった状態で、S D01から流失した可能性がある。また、南側では30~100cmの長さの杭12本が倒れ込む形で検出された。なおこの遺構からは「景德元寶（北宋、初鑄1044年）」が1枚出土している。

S E01は、調査区の南端で検出された素掘りの井戸である。直径159cm、検出面からの深さ150cmを測る。出土遺物はほとんどなく、掘削された時期については不明である。

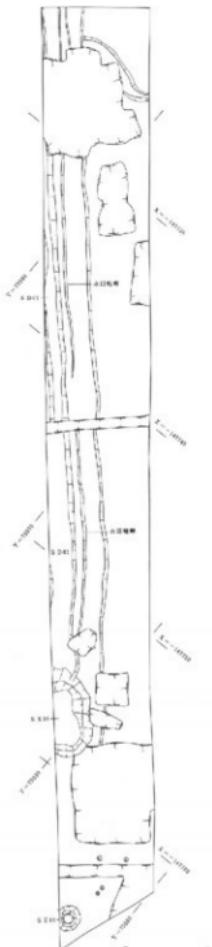
III 区 この調査区は、中世と古墳時代の遺構面を確認した。

第1遺構面 第1遺構面では、中世の自然流路を2条検出した。

幅約6.7m、深さ約1.4mの南西~北東方向に流れる流路1に、北西から南東方向にやや幅の狭い流路2が流れ込んでいる。流路2は反対の肩が調査区外であるので、幅は不明であるが、深さは約80cmである。埋土の上層から14世紀代の土器が出土しているので、この頃に埋没したものと思われる。なお、流路の埋土の上層にはI区・II区と同様獸骨が点在していた。



fig. 333 S X01



Ⅲ区でも中世の水田耕土層は存在している。しかし北に上がるにつれ明確には分層できないが、砂質が強くなり、耕土としては不適当な土に変わっている。水田畦畔はⅢ区では確認できなかった。

第2遺構面 第2遺構面は、中世の流路で遺構面が削られており、わずかに古墳時代の溝1条、土坑1基、ピット17基を検出したにとどまった。

S D11は、幅約2.6m～4.0m、深さ約60cmの西から東へ流れる溝で、埋土の黒色シルト層から5世紀前半の土器がまとまって出土している。

ピットはいずれも直径20～40cm、深さ20～30cmのもので、建物としてはまとまらなかつた。

3. まとめ 今回の調査では、中世の水田と古墳時代の集落の一部を検出した。

中世については、大畦畔と溝を検出することができた。現在の街路は古代の条理地割の名残りであるといわれているが、この畦畔と溝は現在の街路とほぼ平行しており、現在の地割が少なくとも中世までは遡ることが明らかになった。

また中世の溝に点在している獸骨であるが、出土状況からある程度流れていることがうかがえ、この場所での水田祭祀に伴うものと考えるよりは、もう少し上流で何らかの理由で廃棄もしくは安置されていたものが、洪水で流されてきたものと考えるほうが妥当であろう。付近に皮革業者の集団が存在した可能性も考慮する必要があるかもしれない。

古墳時代については、Ⅲ区で検出した溝は第3次調査の溝に続くものである可能性が高い。今回の調査では建物は検出できなかったが、この場所が集落の内部であることは否定できない。



fig. 335 Ⅲ区遺構面全景

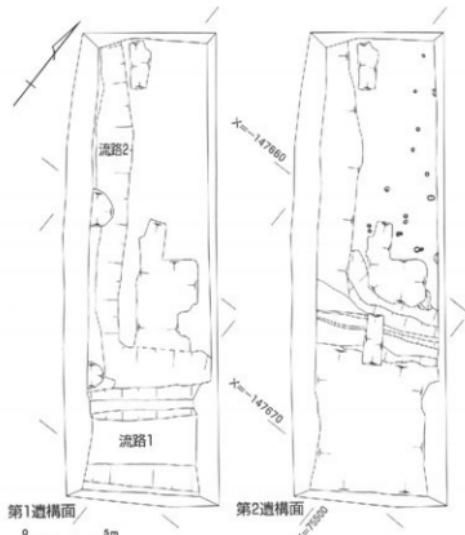


fig. 336 Ⅲ区遺構面平面図

ふたばちょう 45. 二葉町遺跡 第5-1・Ⅱ次調査

1. はじめに

この遺跡は、六甲山系から流れだした妙法寺川や茹藪川などの河川によって形成された、扇状地性の末端部分に立地している。調査地は、現在の海岸線から約600m内陸の標高5m前後の地点である。



fig. 337
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

層序は1区南壁断面に基づいて述べる。またトレンチ調査においても層序は基本的に同基本層序の堆積が観察された。

現代盛土層（1層）の下層に旧耕土（2層）が存在する。3層は洪水に起因する堆積層と考えられるが、3層中に含まれる土器はそれ程磨滅していない。4層を削除すると5層上面に牛と考えられる足跡が散見された。5層を削除すると遺構面となる。遺構面は標高4.2m前後である。

3・4層中からは、土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁・陶器・土鍤が出土した。

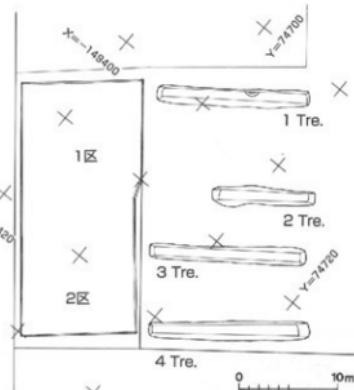


fig. 338 調査区設定図

検出遺構 検出された遺構は、掘立柱建物3棟・井戸状遺構1基・土坑・ピット・溝などである。また遺構検出面には牛の足跡と考えられるものが、散見された。

S B01 S B01は、3間×3間（東西柱間2.4m・南北柱間1.9m）以上で総柱建物である。検出された掘立柱建物のなかで柱穴の規模（直径0.4m・深さ0.4m）が大きい。

S B02 S B02は、3間×4間以上（東西柱間2.3m・3.0m・南北柱間1.9m・柱穴の規模直径



fig. 339 S B01～03



fig. 340 S E01

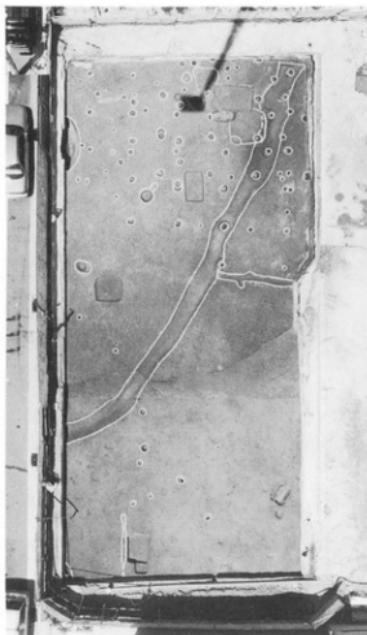


fig. 341 1・2調査区全景

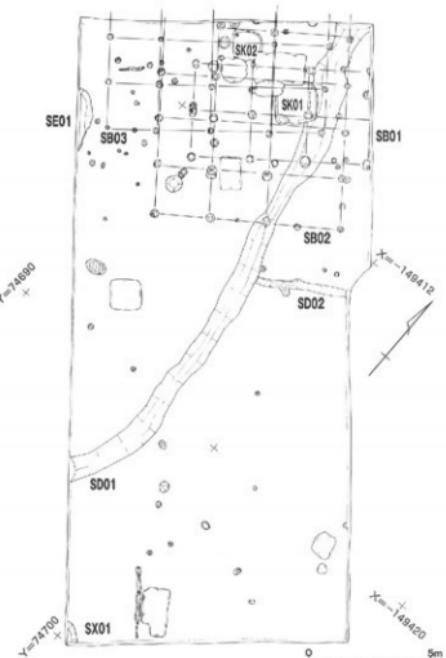


fig. 342 調査区遺構平面図

0.3m・深さ0.3m)の総柱建物である。柱穴規模と柱間距離より南北棟で東側に廂を持つ建物と考えられる。さらに柱通りから南東部に1間分の軒の張出があることも考えられる。この2ヶ所の柱穴は小さく直径0.15m・深さ0.1mのものである。

S B03 S B03は、4間×2間以上(東西柱間2.1~2.3m・南北柱間1.9m)のやはり総柱建物である。柱穴の規模は、ほぼ直径0.2m・深さ0.3mのもので他の2棟より小さい。

掘立柱建物3棟それぞれの柱穴から微量の土師器・須恵器・瓦器が出土しているが、いずれも小破片で時期を決定することは難しいが、12世紀頃としておく。

S D01 S D01は、幅約1.0m・深さ約0.2mの規模で、調査区北東隅部から南西方向に走る溝状遺構である。溝状遺構に切り合う柱穴はすべて、柱穴が溝を切る。堆積土は黒褐色粘質砂泥で、微量の土師器・須恵器と磁石が出土した。

S K01 S K01は、1辺約1.8m・深さ約0.1mの方形の土坑である。少量の土師器・須恵器が出土した。S K02は、1辺約1.2m・深さ約0.05mの浅い方形の土坑である。遺物は出土せず、ともに性格については不明である。ただしS K01・02については、S B02の柱間に内にだけ納まることからS B02に関連する遺構とも考えられる。

S X01 S X01は、調査区南西隅部で検出された深さ約0.15mの落ち込み状遺構である。遺構内の堆積土は、S D01のものとよく似ており、S D01が蛇行した一部という可能性もある。

S E01 S E01は、調査区西辺北で検出された井戸状遺構であるが、大半が調査区外にあるため、南北約2.5m・深さ約0.8mだけ掘削したに止まる。少量の土師器・須恵器・陶器・土鍾が出土した。遺物から他の遺構より時期は新しいものようである。

調査区南半部では、10数カ所のピットが検出されたが建物等にまとまるものはない。

トレンチ調査 トレンチ調査では、1トレンチで土坑状の遺構が1基検出されたに止まる。前述したが、各トレンチの層序は基本的には同様であるが、東に行く程層全体が砂質になり、遺構の密度も極めて希薄になっていくようである。

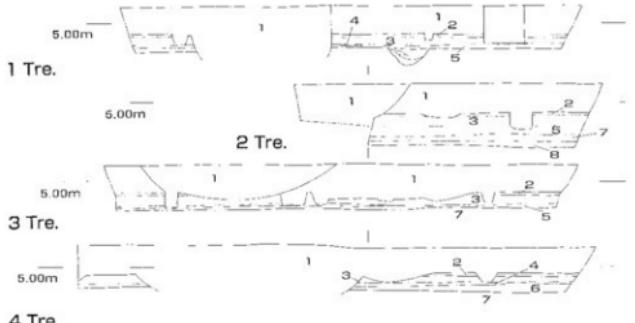


fig. 343

1~4 トレンチ北壁断面図

- 1. 現代盛土および搅乱土
- 2. 灰色泥砂(旧耕土)
- 3. 褐色砂
- 4. 褐色砂泥
- 5. 灰黑色粘質砂泥
- 6. 濁黄褐色粘質砂泥
- 7. 黄褐色粘質砂泥
- 8. 黄灰色泥砂

0 5m

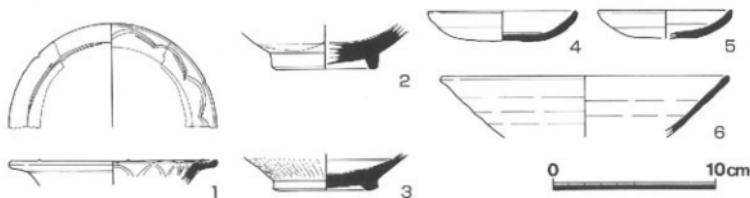


fig. 344 出土遺物実測図

1~3. 包含層 4. SK01 5. P52 6. P58
(1. 青磁 2・3. 白磁 4・5. 土器器 6. 須恵器)

3. まとめ 遺構の検出密度は、平面図に示すように北側に高く南側では極端に低い状態である。トレンチ調査からも遺構は北東側に広がるようである。

今回の調査（第5次）と第1・3次調査の成果から、中世の集落は第5次調査地と第1・3次調査地にまとまりがあるようと考えられる。



fig. 345 調査区全景

46. ふたばちょう 二葉町遺跡 第6次調査

1. はじめに

阪神・淡路大震災後、新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業が都市計画決定された。事業計画予定地は、北に松野遺跡と南に二葉町遺跡が存在する陸の標高区域であるため、平成7・8年度に試掘調査を全域にわたり実施した。その結果、腕塚町6丁目・久保町6丁目では、遺物包含層と遺構面が存在することが確認された。

新長田駅南第1地区（久二塚5丁目）の再開発事業を進める中で、銀行仮設店舗の建設を行うこととなり、建設に先立って発掘調査を実施した。



2. 調査の概要

基本層序

層序は東壁断面に基づいて述べる。調査地現況は駐車場で1・2層は舗装材、3・4層は現代盛土層が約0.6mあり、この下層に旧耕土（5層）が存在する。6・7層に中世の遺物を含み、8層上面が遺構面となる。遺構面は標高3.7m前後である。6・7層は洪水に起因する砂質の堆積層と考えられる。6・7層中に含まれる土器はそれ程多くない。土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁などが出土した。

検出された遺構は、溝状遺構10条・井戸1基・土坑・ピット・落ち込み状遺構である。

S E01は、調査区西北部で検出された井戸である。遺構の一部は調査区外にあるが、平面形は楕円形であると推定される。長径2.0m・短径1.3m・深さ約1.0mの規模で少量の土師器・須恵器・陶器・染付け陶器などが出土した。出土遺物より近世に所属する時期の遺構と考えられる。他に直径0.2mの黒漆塗りの椀が出土した。

S K01は調査区北東部でS D06を切って検出された土坑である。規模は、東西2.4m・南北0.9m・深さ約0.1mで灰色砂泥が堆積し、微量の土師器・須恵器が出土した。平面形から墓とも考えられるが、遺構が浅く性格については不明である。

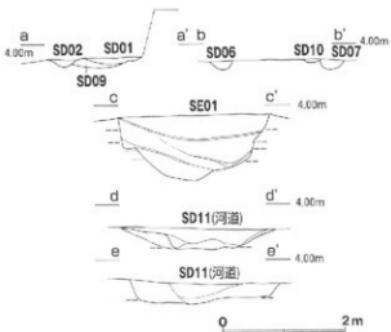


fig. 347 遺構断面図



fig. 348 SE 01

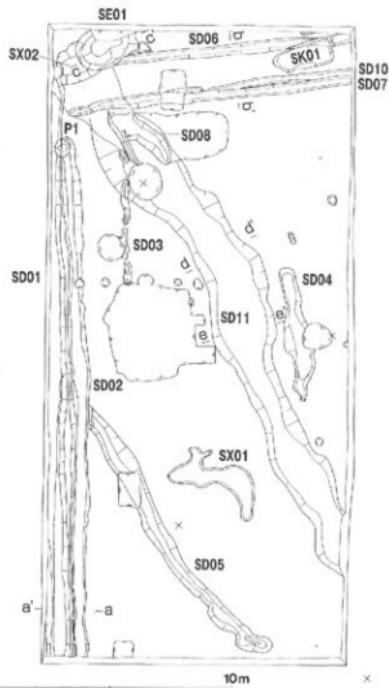


fig. 349 調査区平面図

S X01は、調査区南中央部で検出された、不定形の落ち込み状遺構である。深さ約0.1mで、黒褐色砂泥が堆積する。遺物は出土しなかった。

S X02は、調査区北西隅部で検出された落ち込み状遺構である。東側をS E01に西側をS D01に切られる遺構である。幅約1.4m・深さ約0.4mやや深い遺構で、少量の土師器・須恵器・瓦器が出土した。

ピットは全部で6ヶ所検出された。建物としてまとまるようなものはない。

調査区西辺で、南北方向に走る溝状遺構SD01・02・09が検出された。先ずSD01・02が検出され、この下層にSD09が検出された。遺構のそれぞれの規模は、SD01幅約1.0m・深さ約0.1m、SD02幅約0.5m・深さ約0.15m、SD09推定幅約1.0m・深さ約0.15mである。

SD01・02の堆積土は褐色と灰色の泥砂層であり、SD09は褐色の砂泥である。1条の溝の堆積を区別して検出したかとも思われるが、検出状況や堆積土の差異から別々の溝として調査を行った。SD01の底面には牛と考えられる足跡が散見された。

それぞれの溝から土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁が出土した。ほかにSD01からは



fig. 350 調査区全景

緑泥片岩が多数出土した。それぞれの出土遺物に大きな時期差はないようである。

調査区北辺で、1.3mの間をあけて東西方向に平行に走る溝状遺構 S D06・07が検出された。遺構は、それぞれ幅約0.4m・深さ約0.1mで同様の規模である。S D06は、西端はS E01に切られている。S D07は北側の一部をS D10（幅約0.3m・深さ約0.05m）によって切られており、調査区北西隅部で終わる。S D06・07の堆積土は褐色の砂泥層で、それぞれの遺構内からは少量の土器類・須恵器が出土した。

S D01・02・09とS D06・07はそれ直交する関係にある。現在の直交する道路（大正筋・昭和筋）とは少し方位を異なるものの、中世の地割りを示すものであろうか。

先に述べたS D10も浅く、堆積土は灰色泥砂である。遺構検出の過程で、とくに調査区南半では、遺構面が北半に比べやや粘質であったためか、方向は同様で、かつ浅く、灰色泥砂が堆積した鋤溝が多数検出された。S D01・02・09とS D06・07に囲まれた南東部は、畠として利用された箇所であろうか。水田ではなく畠とするのは、調査地点の旧耕土より下層の堆積土が砂を主体とした層で、水捌けが良すぎるようであり、水田として利用するには、中世の農業技術はここまで到達していたかどうか疑問があるためである。

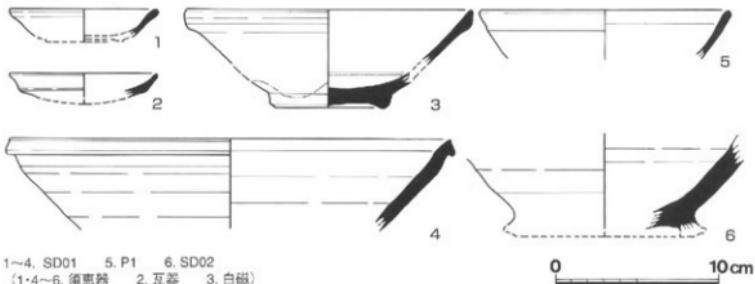


fig. 351 出土遺物実測図

S D05は、幅約0.6m・深さ約0.1mの溝状遺構で、調査区南半で検出された。堆積土は、黒褐色砂泥で上記の溝状遺構内の堆積土とは異なる。北はS D02に切られ、南は調査区南端で終わる。微量の土師器が出土した。

S D08は、調査区北西部で検出された溝状遺構である。幅約0.8m・深さ約0.2mで南北に枝分かれ（幅約0.3m・深さ約0.1m）する。灰褐色砂が堆積し、微量の土師器・須恵器が出土した。

S D11（河道）は、調査区北西から南東に走る河状遺構である（幅約2.6m・深さ約0.4m）。他の遺構検出面より少し下げたところで検出されたため、中世の時期より古い遺構であると考えられる。黄褐色粗砂が堆積しており、遺構内から微量の弥生土器とサヌカイト1片が出土した。遺物から時期の決定は難しい。

3. まとめ 検出された遺構は、S E01・S D11を除き概ね12世紀頃の時期と考えられる。

明治18年の地形図と現代のものと重ね合わせると、当調査地点は旧駒林村から北へ約400mと旧西尻池村から西へ約600mのそれぞれの里道がちょうど交差する地点にある。旧駒林村から北へ伸びる大正筋、旧西尻池村から西へ伸びる昭和筋がそれにあたるようである。

調査地周辺は、大正初め頃の耕地整理が行われるまでは、明治18年の地形図にあるような江戸時代末期頃の景観が残存していたようである。

南北方向の大正筋と東西方向の昭和筋が商店街として発展し、さらに戦後新長田駅が開業（1954年）し新長田1番街が駅とつながって現在にいたる。

鎌倉時代中期の景観と江戸時代末期のそれを直ちに結び付けることはできないが、さきに述べた里道に関わるような溝状遺構であろうか。

また先述したが、溝状遺構に囲まれた区画は、畠として利用されていたと考えられる。そして第1・3・5次調査の調査成果より、第1・3次調査地と第5次調査地に建物が集中しており、当調査地は生産を行う区域であり、当調査地の東へ約20mから集落が広がっていたという空間構成が考えられる。



fig. 352 調査区遠景

ふたばちょう 47. 二葉町遺跡 第7次調査

1. はじめに

二葉町遺跡は、六甲山系から流れだした妙法寺川や茹藻川などの河川によって形成された、扇状地の末端部分に立地している。調査地は、現在の海岸線から約600m内陸の標高4m前後の地点である。



2. 調査の概要

調査区はL形で、東西約65m・南北幅約6mの東西に長い調査区で、東西方向に南からA～C、南北方向に東から1区～6区まで地区割りを行い、遺物等の取り上げを行った。

基本層序

層序は1-C区西壁断面に基づいて述べる。調査地現況は更地である。現代盛土層が約0.4～0.5mあり、この下層に旧耕土（1層）が存在する。2層（暗乳褐色砂）に中世の遺物を含み、3層（暗乳黄褐粗砂）上面が遺構面となる。遺構面は標高3.3m前後である。3層は洪水に起因する砂質の堆積層である。2層中に含まれる土器はそれ程多くない。土師器・須恵器・瓦器などが出土した。3層は遺構の断割りなどで数片の突帯文土器が検出された。

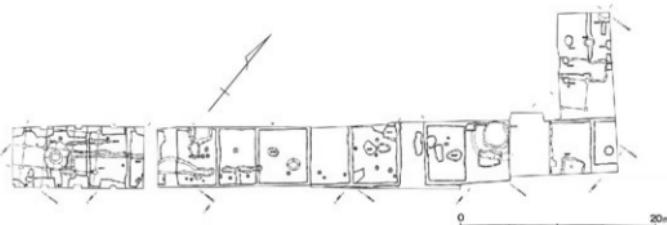


fig. 354
調査区設定図



fig. 355 調査区西部全景

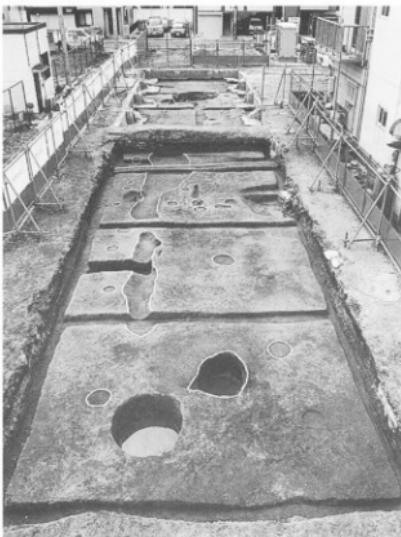


fig. 356 調査区東部全景

検出された遺構は、溝状遺構 2 条・井戸 1 基・土坑 8 基・ピット約 40 カ所・落ち込み状遺構 5 基である。

東西に長い調査区で、概ね東半部は遺構面が粗砂で西に行くにつれてやや細かい砂となっていく。

1-A～C 区では土坑 6 基・ピット 5 カ所・落ち込み状遺構 1 基が検出された。SK02～04 は長径 1.0m 前後・短径 0.8m 前後・深さ 0.3m 前後の同様の規模の土坑である。SK04 から微量の上師器・須恵器が出土した。

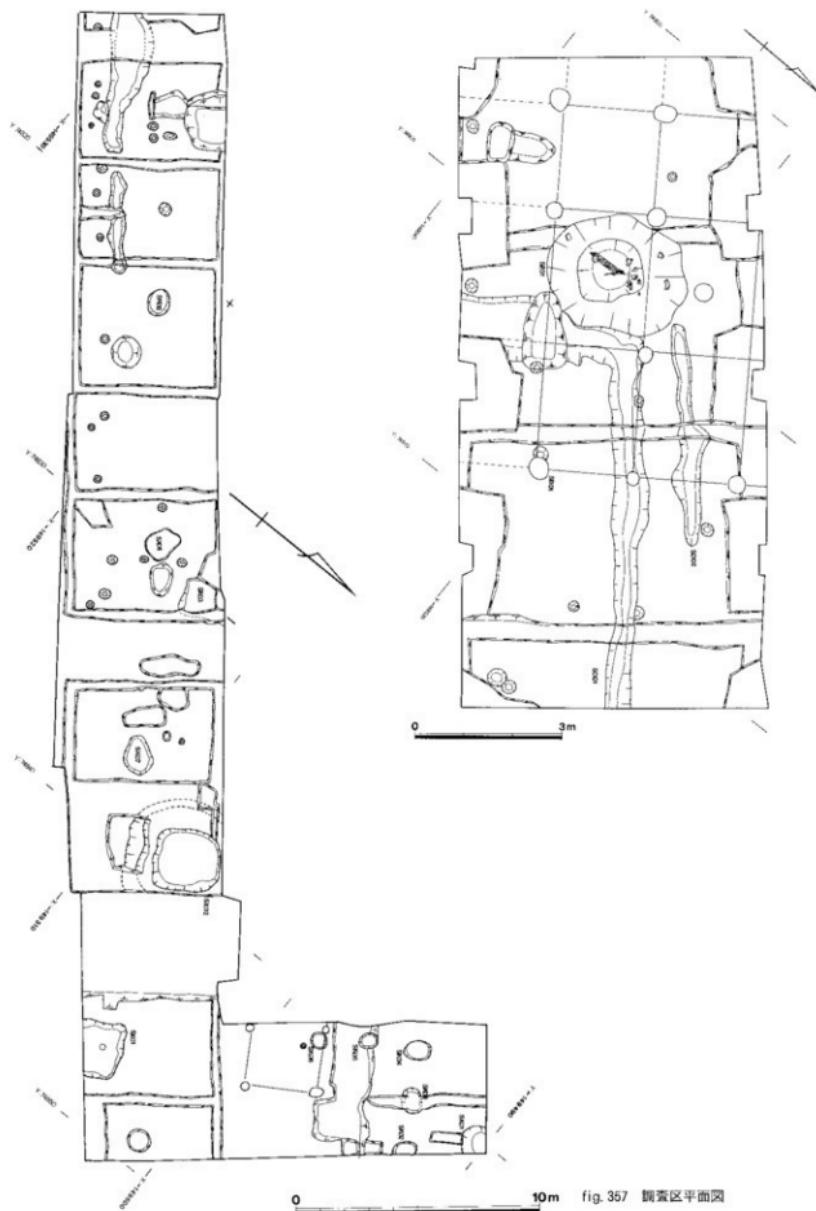
SK01 は深さ 0.4m の土坑と思われるが、北東部が調査区外にあるため全貌は不明である。微量の土師器が出土した。

SK05 は長径 0.7m・短径 0.6m・深さ 0.3m、SK06 は直径 0.6m・深さ 0.3m の梢円形および円形の土坑である。

2-B 区でピット 4 か所が検出された。建物としてまとまる可能性もあるが、現状ではこれ以上は言及できない。

SX01 は、検出された部分のみからは 1 辺 2.2m 前後・深さ 0.2m 足らずの浅い落ち込み状遺構である。底面から直径 0.2m・深さ 0.1m 足らずの浅いピットが 1 カ所検出された。とくに出土遺物はなかった。

SX02 は、調査区東 2-B 区で検出された、1 辺約 4.2m・深さ約 0.9m の隅丸方形の平面形を呈すと考えられる落ち込み状遺構である。東西辺は擾乱を受け、北辺は調査区外となり南辺の一部のみが残存していた。遺構の掘形が 2 段になることから隅丸方形の平面



形と推定した。少量の土師器・須恵器・白磁・青磁・瓦器・土師質平瓦片とサヌカイト片1片が出土した。

4区ではS K07・S X03・04やピット10数カ所検出された。またピットは、建物などにまとまるものはなかった。

S E01は、5-A・B区で検出された井戸である。井戸掘形の断面形は漏斗状で上半部は素掘りで、下半部に曲物を転用して3段に組んで井戸枠とした構造である。平面形は南北に長い楕円形で、長径2.8m・短径2.5m・深さ2.9mの規模である。下半部の曲物の井戸枠は、井戸枠の直径より僅かに0.02~0.05m程大きい径の掘形に曲物を入れている。

1段目の曲物は直径0.42m・高さ0.25mで上部のみに幅0.06mの箍が付く。2段目の曲物は直径0.33m・高さ0.32mで上端と下端にそれぞれ幅0.04mと0.05mの箍が付く。2段目の曲物と3段目の曲物との間に0.11m程の隙間があり3段目となる。3段目の曲物は直径0.24m・高さ0.29mで2段目同じように上端と下端にそれぞれ幅0.06mの箍が付く。また曲物の内面下半には黒漆が塗ってあるようである。3段目の曲物には南側に自然木で曲物が動かないように押さえている。この木は長さ0.2m・直径0.03mほどの又になつた自然木の枝で、又になつた部分にさらに切り込みをいれ曲物を挟みこんで押さえている。さらに3段目の曲物の南側下部に長さ0.2m・幅0.03m・厚さ0.01m程の桟木としてかませていた。この桟木は非常に残存状況が悪くほとんど腐っていた。

曲物の直径から分かるように、下部にいくに従って井戸の掘形は狭まっていく。2段目の曲物の下部から地山が、粘土層から青灰色礫砂に変わり、この層が湧水層と思われる。



fig. 358 S E01

- | | | |
|---------|----------|-------------|
| 1 茶褐色泥砂 | 6 淡茶褐色泥砂 | 11 灰色粘質砂泥 |
| 2 揚灰色砂泥 | 7 淡黄褐色砂泥 | 12 淡青灰色粘質砂泥 |
| 3 茶灰色泥砂 | 8 黒色粘質砂泥 | 13 黑灰色粘質砂泥 |
| 4 暗灰色泥砂 | 9 淡黃褐色泥砂 | 14 青灰色粘質砂泥 |
| 5 灰色泥砂 | 10 黄褐色砂泥 | 15 暗灰色粘質砂泥 |
| | | 16 青灰色礫砂 |

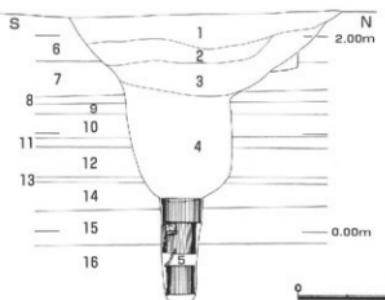
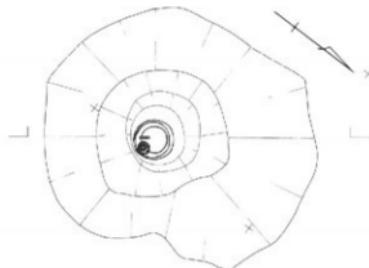


fig. 359 S E01平面図・断面図

このあたりの標高が0 mである。

井戸内から土師器皿・須恵器鉢・碗・瓦器と小型の桶・板・杭などの木片が出土した。小型の桶は、直径0.15m・高さ0.115mのもので2段目の曲物の中から出土した。また同じ箇所から外面に「本」と墨書きされた須恵器碗が出土した。出土遺物から11世紀末から12世紀初頭に属する時期と考えられる。

遺構の切り合い関係は、SD01がSE01の東側を切っている。またSD01の底からSB01を構成する柱穴が検出されたため、SD01のほうが新しいことになる。敢えて古い順番に並べれば、SE01-SB01-SD01となる。3つの遺構より出土した遺物からも概ね新旧関係はこの順序であろう。

SD01は調査区西部4~6-A区で検出された溝状遺構である。幅0.4~1.6m・深さ約0.1mで東西方向にのびるが、SE01の東側でSE01を切って南にのびる。土師器・須恵器・瓦器・白磁が出土した。また5-A区で突帯文土器が1片出土した。

SB01は調査区西部6・7-A・B区で検出された掘立柱建物である。東西3間以上南北2間以上の建物で、ピットの検出状況から東にはひろがらないと考えられる。東西柱間2.2~2.7m・南北柱間2.0mで、SB01-P10からは、土師器皿2個体、SB01-P3から土師器皿・須恵器碗それぞれ1個体出土した。

沖積地に存在する遺跡であるため、検出された遺構面を断ち割りさらに下層の遺構の存在の有無を確かめるための作業をおこなった。1-A・4-B・6-A区などで縄文土器や縄文時代終末期の突帯文土器が微量出土した。弥生土器は出土しなかった。また下層の遺構面も存在しなかった。

3. まとめ 検出された遺構は、土坑・溝状遺構・井戸と掘立柱建物である。出土遺物等から12世紀頃の時期と考えられる。

これまでの調査内容から、二葉町遺跡の集落の南北の広がりは、第5次・第1・3次調査地から今回の第7次調査地を含めて南北約200m前後であると思われる。また第7次調査地の南約50mあたりで遺跡の南限となるのではないかと思われる。東西のひろがりは第6・2次調査地を結ぶ線あたりが東限かと思われる。



fig. 360 SB01



fig. 361 SX02

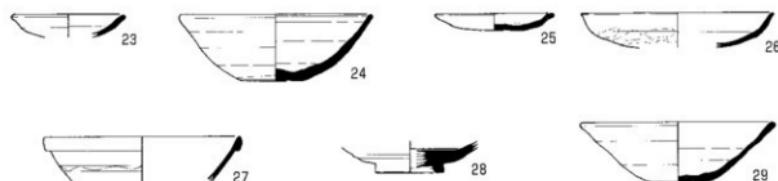
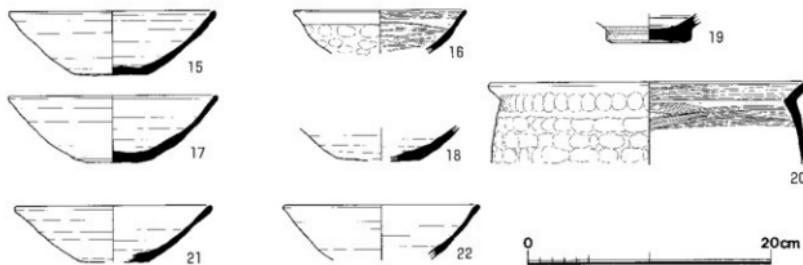
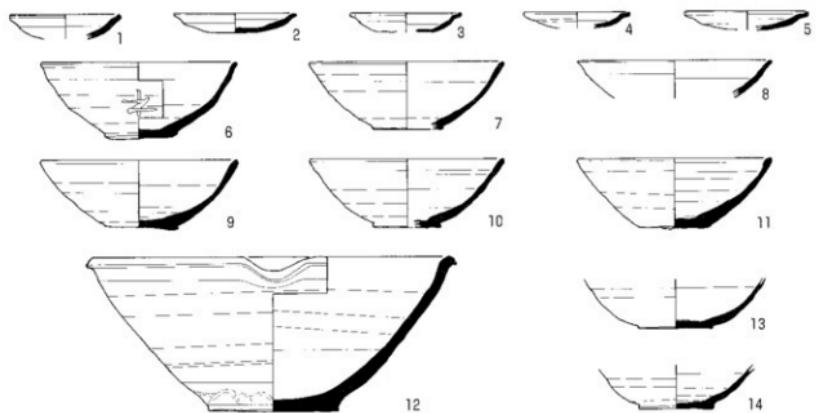
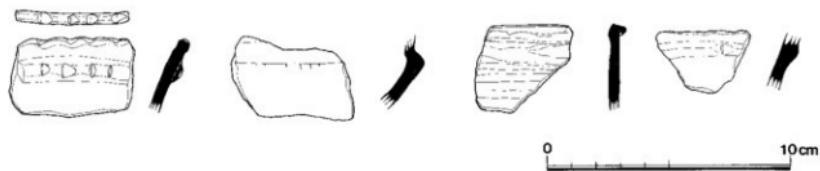


fig. 362 出土遺物実測図

ながたほんじょうちょう 48. 長田本庄町遺跡 第1次調査

1. はじめに

調査地は、神戸市長田区本庄町7丁目に所在する。今回の調査は、共同住宅建設に先立つもので、平成9年11月におこなわれた試掘調査で、古墳時代の遺物が出土し、遺構が検出されたことを受けて実施された。



2. 調査の概要

調査は、建設予定の構造物により、地下遺構が破壊される範囲のみ実施した。調査区の配置は図に示した。従前の建物の基礎およびその除去のため、調査範囲の半ばが搅乱を受け、遺物包含層・遺構が遺存している範囲も、その影響を受けていた。

3. まとめ

今回の調査では、A区で自然流路の可能性が高い溝、B区で柱穴および畑作に伴うと推定される溝、C区で柱穴・溝・池状遺構が検出された。遺構はいずれも黄褐色の砂層または砂質シルト層の上面（同一面）で検出されている。

A区で検出された溝は、幅1.8~2.0m前後と考えられる。調査区をほぼ縦貫する位置を占め、概ね南北に延びている。溝は黒色のシルト～細砂で埋積されており、自然堆積により埋没したものと考えられる。溝の東側は急斜度の落ち込みを見せるが、西側はゆるやか

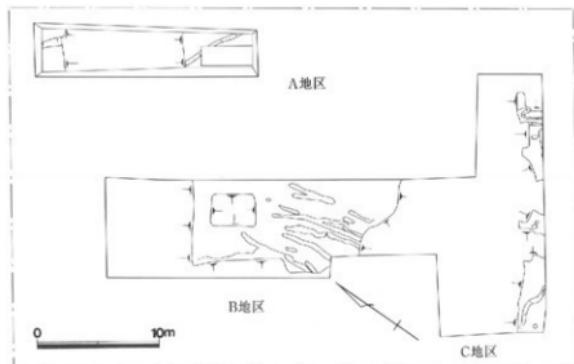


fig. 364
調査区平面図

な傾斜になっており、人為的な掘り込みとは考えにくい状況である。埋土中からは遺物はほとんど出土しなかったが、撲乱部で古墳時代の土師器片が数点出土しているほか、B区の遺構と概ね同様な埋土であることから、同時期のものと判断してよいだろう。

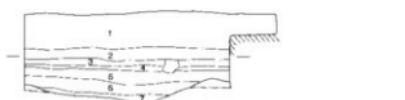
B区は、北部と南部で撲乱が著しく、中央部で遺構が検出された。検出された遺構は、溝8条と柱穴1基である。

8条の溝は概ね南北に延びるが、数条を単位として若干方向を異にしている。溝の幅は広い部分でも30cm程度である。深度は、検出面から数cm～10cm程度であるが、溝底には溝を掘削した際の跡跡と思われる凹凸が顕著に認められた。溝内は黒色の砂質シルトで充填されており、古墳時代の初頭に属すると思われる土師器片が出土している。

C区では、柱穴4基と溝および池状遺構が検出された。溝と池状遺構は一連のものであったと考えられるが、撲乱を受けた部分が多く、その全容は不明と言わざるを得ない。少数の土師器片が出土したことと、埋土がB区の古墳時代遺構に類似することから、同時期のものと考えてよいだろう。

柱穴のうち2基は、中世に属する。古墳時代の遺構と異なり、黄灰色の砂で充填されていた。東播系の須恵器碗が出土しており、その形状から、12世紀の範囲におさまるものと考えられる。他の2基は、旧表土（水田耕土）に近い埋土であることから、近世以降のものかと思われるが、遺物を出土せず時期は不明である。

遺構面の調査終了後、B地区の東壁に沿って、下層の状況を確認するためのトレンチを設定し、調査をおこなった。その結果、南に向かって下がる砂～礫層の連続的な堆積が認められ、調査地周辺が頻繁に洪水に襲われたことが明らかとなった。砂礫層中からは、弥生時代後期と考えられる土器が多数出土したことから、調査地から遠くない位置に、当該時期の遺跡が存在する可能性が高いものと思われる。



A地区北壁

(1:80)



B地区東壁

(1:400)



C地区南壁

(1:400)

- 1. 表土・底土および堆積層
- 2. 黒褐色シルト質～粗砂
- 3. 黄褐色シルト～中砂（中世の遺物を含む）
- 4. 黑褐色シルト質細砂～中砂（5層上部が土壌化したもの）
- 5. 黑褐色シルト質細砂～中砂
- 6. 黑褐色細砂
- 7. 黑褐色シルト～粘土（一部にラミナ状の堆積構造を見せる）

- 1. 表土・疊土および堆積層
- 2. にじみ黄褐色シルト質粗砂（土壌化している）
- 3. 黄褐色細砂層～中砂（土壌化している）
- 4. 黑褐色シルト質粗砂（遺物含む）層と同一層の可能性が高い
- 5. 黑褐色シルト質粗砂～中砂（遺構層出現を構成する層）
- 6. にじみ黄褐色細砂（5層上部が土壌化したもの）
- 7. 黄褐色細砂（層底が土壌化している）
- 8. 黄褐色細砂～粗砂（海浜が進んでいる）
- 9. 黄褐色細砂～中砂
- 10. 黄褐色質砂シルト
- 11. 砂礫層（これはペブル～グラニュール質、マトリックスは粗砂～粗粒砂）
- 12. 混合層（数枚のもの複化している）、海浜が進んでいる
- 13. 黄褐色細砂（海浜が進んでいる）
- 14. 黄褐色細砂
- 15. 黄褐色砂層（底へ傾斜するラミナが見られる）

fig. 365 調査区断面図

みふね 49. 御船遺跡 第2次調査

1. はじめに

御船遺跡は長田区のほぼ中央部を流れる新湊川の西岸に位置しており、近年において確認された遺跡である。

今回の調査は住宅建設工事に伴うもので、弥生時代後期～中世の遺構、弥生時代前期～中世の遺物が確認された。



fig. 366
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

基本層序

上層より現代盛土、旧耕土、中世包含層の順で、中世包含層の下層上面が第1遺構面となる。さらに、第1遺構面ベース層にあたる河道状堆積、水田耕土、水田ベース層と続く。

第1遺構面

7世紀後半～11世紀後半の掘立柱建物、溝、土坑、井戸などの遺構が確認された。

掘立柱建物

S B01は、建物規模が南北4間×東西3間以上で、周囲に雨落ち溝を巡らす。北側と東側のS D04の外側の柱穴は、建て増しによるものと考えるのが妥当であろう。柱間は2～2.6m、柱穴は径が約20～40cmで、深さが約10～50cmである。

S B02は南北3間×東西2間の小規模なもので、柱間は1～1.6mで、柱穴は径が約60～80cmで、深さが約25～35cmである。

S B03～05については、調査区内で建物的一部分しか確認されておらず、規模については不明である。S B04については、柱穴規模が他の建物よりも大きく、径が約80～90cm、深さ約30～50cmを測る。

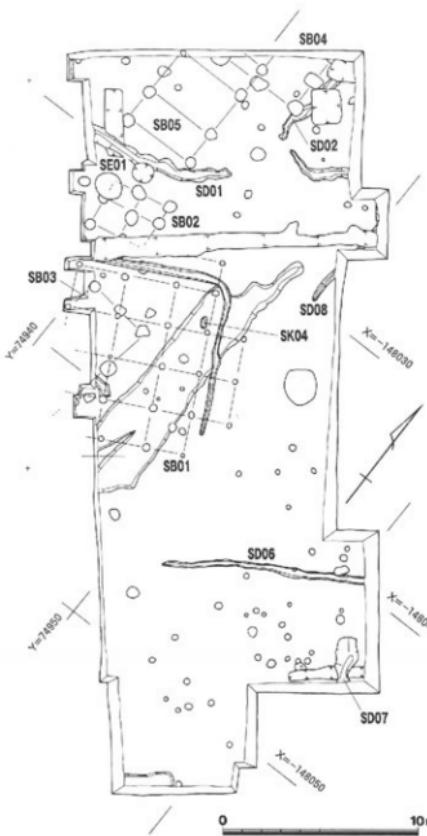


fig. 367 第1遺構面平面図

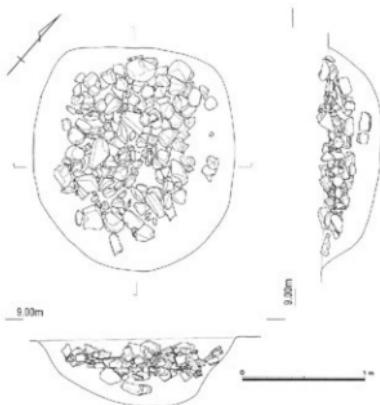


fig. 368 SK01平面図・立面図



fig. 369 SE01

SK01 長径 1.8m、短径 1.7m、深さ 60cm を測る楕円形状の土坑である。拳大～人頭大の石や土器片が投棄されたようなかたちで検出された。

SE01 長径 1.4m、短径 1.2m、深さ 90cm の円形井戸である。埋土の状況から、一辺約 65cm の方形の井戸枠が存在していたと考えられ、底部で遺存がかなり悪いものの、径約 40cm 程度の曲物が確認された。井戸の下半部で、土器や石が投棄されたようなかたちで検出された。

出土遺物 量的には遺構面を覆う中世包含層からのものが多い。SK01・04、SD04・05などから多くの遺物が確認されているものの、いずれも小細片が大半である。中でも、比較的まとまって数多く出土しているのは SE01 で、土師器小皿・須恵器碗が多い。

小結 第1遺構面で検出された遺構は、その出土遺物から7世紀後半、8世紀後半、11世紀後半のものに大きく分類できるようである。各時期の主な遺構としては、7世紀後半が SB



fig. 370
第1遺構面全景

02・04・05、8世紀後半がSB03、SD01・05・08、11世紀後半がSB01、SD04、SK01、SE01などである。

第2遺構面

第1遺構面のベースとなっている河道状堆積の下で確認された水田面がこれにあたる。

調査区の北半部で確認された。南へ行くほど河道状堆積による削平の影響で遺存が悪くなり、調査区の中程より南側については、畦畔・水田耕土のみならず水田層そのものも残存しなくなる。水田の一区画は約10~40m²で、比較的小規模（小区画）なものである。

調査区の北端に東西方向の大畦畔が存在し、その両側の水田面の高低差が約20cmである。

また、そのさらに北側に北東～南西方向に円弧状の大畦畔が存在し、さらに20cm程度の水田面の高低差がみられる。



fig. 371 第2遺構面全景



fig. 372 第2遺構面畦畔

河道状堆積 第1遺構面と第2遺構面との間に存在する堆積層で、砂礫、洪水砂などで構成されおり、調査区内の南半部がその最深部分となる。これらの層位からは、最上層で6世紀頃の遺物を含むが、その以下層では弥生時代のものしか出土せず、弥生時代後期後半のものが大半を占める。

小 結 水田については、調査区の南半部では削平のため確認されなかったものの、周辺部を含めたかなり広範囲にわたって存在するものと考えられる。水田の時期については、水田耕土から弥生時代後期後半の遺物が出土しているため、ほぼその時期に営まれた水田の可能性が高い。

水田層の下層については、湿地状のシルト系堆積層で、遺構・遺物は、確認されなかった。

3. ま と め 今回の調査では、7世紀後半～11世紀後半の遺構や弥生時代後期の水田などが確認され、第1次調査の成果も含めて、同地域においてはかなり広範囲にわたって集落が存在していたことが明らかになった。

また、第1次調査では確認されなかった11世紀以前の遺構も多く検出され、数百年にわたって集落が営まれていたことが明らかになった。

弥生時代後期においては、生産領域（水田）でしか利用できなかった同地域が、度重なる洪水等による沖積が進み、集落の立地に適した地勢へと変化していった様子がうかがえる。これは、丘陵地帯の裾部にあたり、土砂の冲積が著しい同地域の地形的な特色を示すもので、時代の流れとともに居住域（集落）として利用できる範囲が拡大していったようには定される。また、弥生時代後期の水田址の確認は、近接地域において同時期の集落の存在を肯定的にするものであり、今後における周辺調査の指標となりうる成果の一つであると言えよう。

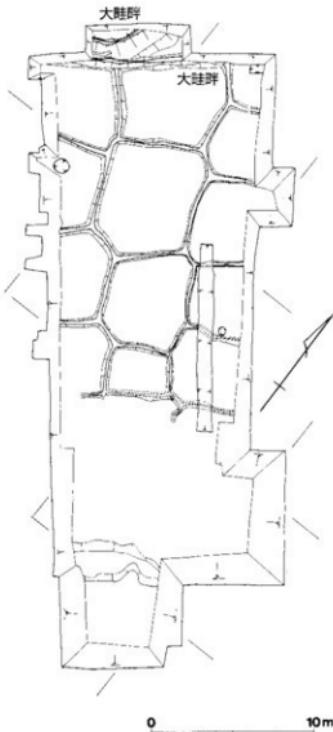
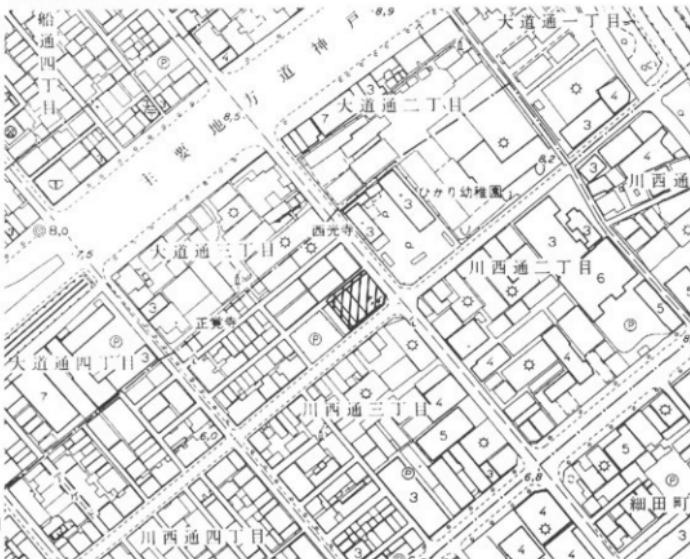


fig. 373 第2遺構面平面図

50. 御船遺跡 第3次調査

1. はじめに

御船遺跡は同地域において新たに発見された遺跡である。長田区のほぼ中央部を流れる新漢川の西岸に位置しており、試掘調査によって中世の遺構・遺物が確認され、遺跡の存在が明らかになった。



2. 調査の概要 今回の調査は教会建設工事に伴うもので、工事によって影響を受ける包含層及び包含層直下の遺構検出面のみを対象とした。

基本層序 上層より現代盛土、旧耕土、中世包含層の順で、中世包含層の下層上面が第1遺構面となる。

包含層を除去したあと、遺構検出を行ったが、遺構は確認出来なかった。よって、影響深度まで掘削を行い、調査を終了した。

3. まとめ 包含層は、僅かに確認されたが、遺構が存在するような状況はなく、弥生時代の河道の上面が、露呈し

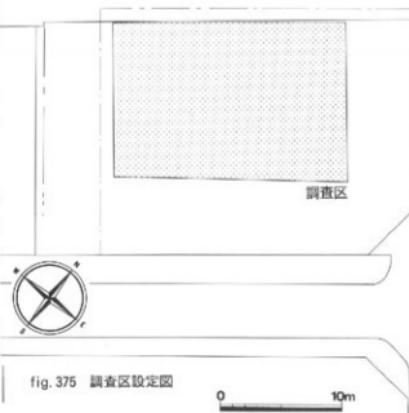


fig. 375 調査区設定図

ている状況となる。御船遺跡第1次調査では、調査区の北半で、建物が幾つか確認されており、その南半では、数基の井戸のみの検出となっている。今回の調査は、1次調査の南に隣接しており、遺構が確認出来ていないこと合わせると、今回の調査区は、井戸周辺の広場か、耕作地にあたり、居住区域外にあたるものとみられる。

18.500m



fig. 376 調査区東壁断面図



fig. 377 御船遺跡遠景

えいばちょう 51. 戎町遺跡 第25次調査

1. はじめに

戎町遺跡は、六甲山系の南にひろがる平野部の西端に所在する。付近は妙法寺川によって形成された緩やかな扇状地と冲積地にあたり、戎町遺跡は妙法寺川左岸の扇状地の末端から冲積地に移行する位置に占地している。戎町遺跡の立地する標高は現地表で約14mである。

今回の調査地点は、戎町遺跡発見の発端となった第1次調査地の西南40mにあたる。

fig. 378
調査位置図
1 : 2,500



2. 調査の概要

今回の調査は、阪神・淡路大震災により被災した個人店舗兼用住宅の復興に伴う調査であり、調査範囲を建築に伴う杭基礎が打設される部分、地表下1mまでに限定して調査を実施した。

基本層序

調査区における基本層序は、現地表下60cm~80cmまでは、現代の盛土・近現代の耕作土が堆積していた。この耕作土下には、淡灰色粘性砂質土と暗灰色粘性砂質土層（弥生時代遺物包含層）が検出される。遺物が確認されていないが、淡灰色粘性砂質土は弥生時代中期以降の堆積層と考えられる。これらの遺物包含層の直下には、黄灰色細砂・淡青灰色細砂がひろがり、上面でピット・溝・河道を検出した。

fig. 379
調査区断面図



C. 深泥・盛土	6. 黄色細砂	12. 淡褐色細砂
1. 盆耕土	7. 暗色粘性砂質土 (黄褐色砂ブロック)	13. 黄褐色粘性砂質土 (望い-修生土層含む)
2. 来土	8. 暗灰色粘性砂質土	14. 淡色シルト (黄褐色粘性砂質土ブロック)
3. 河原石堤塁	9. 淡青灰色細砂	15. 黄褐色細砂
4. 淡灰色粘性砂質土 (複雑形ブロック)	10. 淡青灰色粘性砂質土	16. 暗灰色粘性砂質土
5. 暗灰色粘性砂質土 (黄褐色粘性砂質土ブロック)	11. 黄褐色粘性砂質土	

- 第1トレント** 淡灰色粘性砂質土直下の淡青灰色細砂上面で、東に落ち込む河道を検出した。河道の覆土は、暗灰色粗砂と暗茶褐色砂が堆積していた。覆土内からは弥生土器が検出された。なお、河道上面からピット1ヶ所が掘り込まれていた。
- 第2トレント** 第2トレント北端の淡灰色粘性砂質土直下淡青灰色細砂上面で、溝SD01を検出した。
- 第3トレント** SD01の覆土内からは、弥生時代中期前半の壺・壺形土器が多量に出土した。SD01は、東西に穿たれ、幅1.5m、深さ45cm、断面U字形をしている。覆土は砂と砂混じりの粘質土が交互に、概ね北側から堆積し、最終埋没時には幅60cm、深さ25cm前後の小溝になっていたことが層序観察からわかる。第2トレント南部から第3トレント中央にかけては、近世水田の暗渠排水溝に伴う河原石の集積が見られ、包含層等が削平を被り、ピット等の遺構は浅く底を残すにすぎない。
- 第4・5トレント** 第4・5トレントでは、ほぼ全域で暗灰色粘性砂質土の弥生時代遺物包含層が広がり、層序観察の結果、ピットは包含層上面から穿たれていた。ピットは建物等にまとまるものはない。第4トレントでは、包含層直下に黄灰細砂、第5トレントでは淡青灰色細砂が遺構面となっている。この遺構面上で、溝1条と溝を切る河道1条を検出した。
- 河道はトレント中央で検出した。幅2.6m、深さ30cm、断面レンズ状で、覆土は灰褐色砂・灰色砂・黄褐色砂質土が堆積している。灰褐色砂内から弥生時代後期の細頸壺体部が出土したほかは、出土遺物は少量である。
- 第4トレント南端で東西方向の溝を検出した。溝の南肩は河道による削平を被っているが、幅1.4m（復元）、深さ40cmを計測する。断面形はU字形である。溝内の覆土は、第2トレント検出のSD01と同様に砂と砂混じりの粘土層が交互に北側から流れ込み、覆土も同質の土壤である点から、第2トレントSD01に継続する溝と考えられる。
- 3.まとめ** 今回の調査は、調査範囲の狭小な限定された調査であったが、調査地を横断する弥生時代中期の溝1条と後期末葉の河道や弥生時代以降と考えられるピット群を検出した。検出遺構は調査区北部で密度が高く、南にいくに従って遺物包含層は存在するものの、遺構も少なく、残存状況も悪くなる傾向にある。また、弥生時代中期の溝SD01の覆土が北側から流入していることからも、遺跡の中心地が今回調査地点の北にあることを窺わせる。

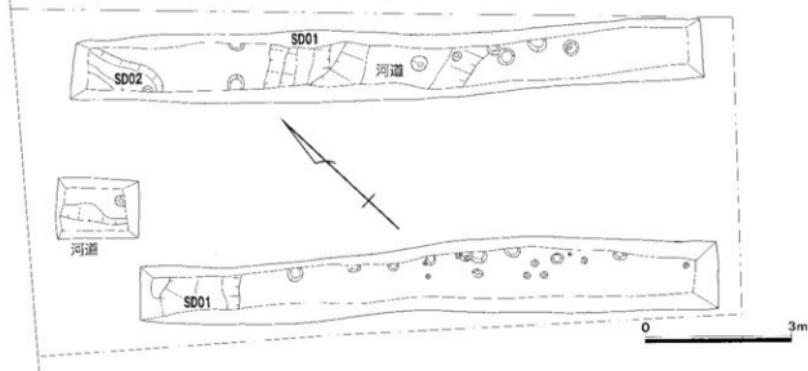


fig. 380 調査区平面図

えびすちょう 52. 戎町遺跡 第26次調査

1. はじめに

戎町遺跡は、山陽電鉄板宿駅の南北に広がると推定され、妙法寺川左岸の扇状地末端の微高地に立地する遺跡である。

これまでの調査で、縄文時代晚期から古墳時代前期および中世の複合遺跡であることが判明してきている。なかでも、弥生時代～庄内期の遺構・遺物が多く確認され、西浜津の最西端に位置する弥生時代の拠点集落と考えられる。



2. 調査の概要

盛土下に旧耕土が存在し、幾つかに分層が可能な砂を主体とする層が存在する。その下に、遺物を含む旧耕土と床土が存在し、床土下面が、第1遺構検出面となる。西半部分では、床土が存在せず、旧耕土直下で、遺構検出面となる。

中世遺構面

第1遺構面は、古墳時代前期および鎌倉時代前期の遺構面が同一面で確認された。

S D01 調査区の西端に位置し、北西から南東に走る、幅0.2m、深さ0.03mを測る溝である。

出土遺物から12世紀の時期のものとみられる。

S D02 調査区の中央に位置し、北から南に走る、幅0.36m、深さ0.13mを測る溝である。須恵器の出土が認められ、時期としては、古墳時代後期の時期が与えられる。

S X01 調査区の中央に位置し、長さ7.25m以上、幅4.10m、深さ0.38mを測る落ち込みである。出土遺物から、11世紀代の遺構とみられる。

弥生遺構面

この遺構面では、弥生時代中期（IV様式）の住居跡1基の他、河道等を検出した。

河道1 この河道は古墳時代後期の堆積層の下面で検出された遺構である。1トレンチと2トレンチで、東から西に落ちる肩を検出した。調査で知りえた範囲では、幅が9m以上、深さは、1m以上を測るものとみられる。出土遺物は、僅かであるが、弥生土器の中に第V様式の土器が認められることから、これ以後の時期の堆積であると思われる。

S B01 4区第8トレンチにて確認した住居跡の落ち込みである。弥生第III様式新段階に起きたとみられる大きな洪水の堆積層の上面から切り込んでおり、ほぼ垂直に落ちる断面に周

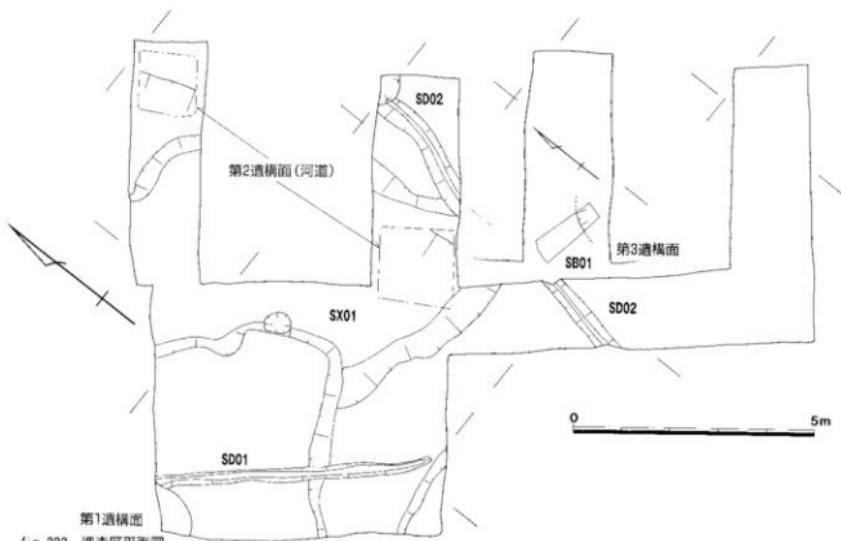


fig. 382 測査図平面図

壁溝状の落ち込みが取りついているのが、断面の観察により、明らかになった。この住居跡状の落ち込みは、1トレンチでは確認されておらず、2トレンチと3トレンチで確認されているだけである。この事から2トレンチから3トレンチにかけての範囲に、直径6mから8m、深さ65cmを測る住居跡の存在が考慮される。しかし、データ不足のため、断定は避けたい。なお、この遺構の内部から、骨や石斧並びに弥生土器(IV様式)等の遺物が出土している。この遺構の時期は、弥生第IV様式の時期に相当するものとみられる。

洪水層 弥生時代の河川の一部ともみられるが、明確にはできなかった。弥生前期の土器を含む堆積層が一部確認されており、この周辺部にも弥生時代前期以降の遺構が存在していた可能性を含むが、そのほとんどが、洪水により削られたとみられる。洪水層の堆積は、弥生第III様式からIV様式にかけての時期と思われる。

3. まとめ この周辺地域は、弥生第III様式新段階と弥生V様式から古墳時代前期の二度の削平により、弥生時代の遺構は希薄な状態となっており、中世の時期においても、24次調査に比べて、土器の出土量も減少しているようである。

弥生時代に関して言えば、今回の調査地においても前期の堆積層が確認されたことにより、弥生時代前期の分布範囲が、西に広がる可能性が指摘される。しかし、氾濫による削平により、今後、確認は困難であるかもしれない。

なお、弥生第III様式から第IV様式にかけての時期に起きた氾濫が大きな打撃を与えた可能性がある。今回検出した住居跡状の遺構は氾濫の鎮静化後に築かれたものとみられるが、災害を受けた後の集落の復旧の所産である可能性も含まれている。

最後に、弥生時代の戎町遺跡の集落は、各時代を通して、相当広い範囲を占めていたものとみられる。

ちとせ 53. 千歳遺跡 第1次調査

1. はじめに

千歳遺跡は、今年度の試掘調査によって存在が明らかになった遺跡である。当遺跡の北方には、戎町遺跡、大田町遺跡等、東方には松野遺跡が存在し、弥生時代前期から中世に至る集落が確認されている。反面、南方及び西方の遺跡の分布は希薄である。



fig. 383
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

第1遺構面

今回は市営住宅建設に伴い、工事により影響を受ける部分について調査を実施した。

近世の耕土を除去すると、調査区西端で溝状遺構が1条検出された。遺物の出土はなく、時期は不明である。堆積状況から、短期間に埋没したと考えられる。

第2遺構面

第2遺構面においては、柱穴数基と溝状遺構4条、土器埋納遺構が検出された。

柱穴

20数基検出されたが、遺構として纏まるものはない。遺物は出土しなかった。

溝

4条検出されたが、いずれも遺物は出土しなかった。

S T201

長径190cm、短径80cmの長楕円形の掘形の南西部を、長径110cm、短径80cmの楕円形に掘り込み、壺型土器を埋置している。壺型土器は、口縁を北西に向かって横位に埋置している。土器内より遺物の出土は無かった。出土状況より、土器棺と考えられる。

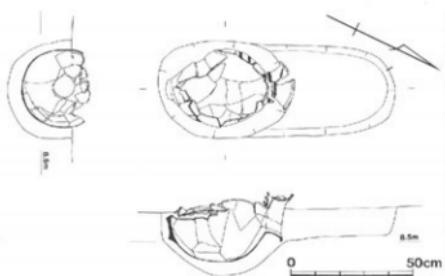


fig. 384 S T201平面図・断面図



fig. 385 S T201

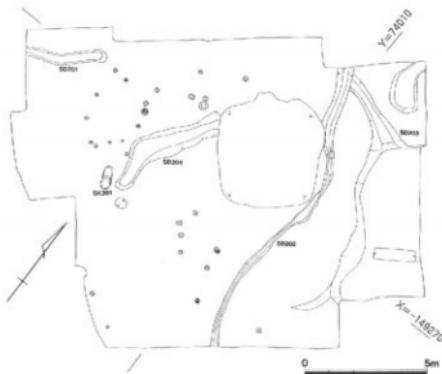


fig. 386 第2遺構面平面図



fig. 387 第2遺構面全景



fig. 388 第3遺構面平面図



fig. 389 第3遺構面全景

第3遺構面 黒色粘土をベースとする遺構面で、溝2条の他、不定形の浅い落ち込みが多数確認された。足跡や畔状の隆起が部分的に見られ、水田面と考えられるが、高低差が少なく確定できない。調査区の東側は東方向に落ち込み、遺物の出土は無かった。

S D301 幅40cm、深さ20cmの溝で、ほぼ南北方向に流れる。遺物の出土は無かった。

S D302 幅50cm、深さ15cmの溝で、ほぼ東西方向に流れる。遺物の出土は無かった。東端部は、東へ落ち込む自然地形に接している。

3. まとめ 遺構の検出数も少なく、遺跡の性格は明らかではない。弥生時代中期の土器棺と考えられる遺構が特記されるが、同時期の遺物の検出が無く、同一面で検出された柱穴との関連は不明である。

今回の調査区は西から東へ緩やかに傾斜しており、東に行くに従い、遺構、遺物の量は減少する。遺構の検出状況からも、当遺跡における居住域等の中心部は、今回の調査区の西側にあると考えられる。

54. 千歳遺跡 第2次調査

1. はじめに 千歳遺跡は、今年度の試掘調査によって文化財の存在が明らかになった遺跡である。第1次調査地点では、弥生時代中期の土器埋納土坑と、下層から水田面と考えられる遺構面が確認されている。



fig. 390
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要 今回の調査は、鷹取東地区土地区画整理事業に伴い実施したもので、道路設置予定の2地点において発掘調査を実施した。

1 トレンチ 第1次調査区の北半部と同様の堆積をしており、遺構、遺物は確認できなかった。

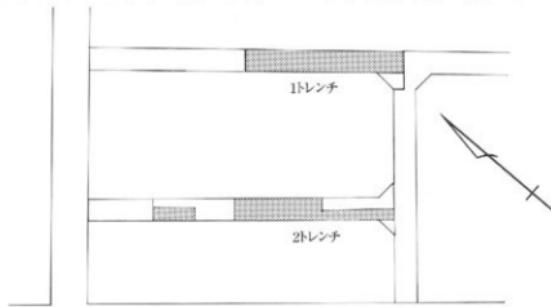


fig. 391
調査区設定図

0 30m

- 2 トレンチ** 調査区の南区は、第1次調査区と同様の層序が確認され、粘質の強いシルト層を基本とした堆積が見られる。対して北区は砂質が強く、粗砂から砂礫の堆積が基本となる。弥生時代中期とそれ以前の遺構面が検出された。
- 第1遺構面** 20~30cmの洪水層を除去すると、第1遺構面が検出された。第1次調査時の第2遺構面に相当し、弥生時代中期中葉の遺構面である。南区の中央部で自然河道2条が検出された他、柱穴が数基検出された。北区及び南区南半部は遺構が希薄である。
- 自然流路** 検出幅約320m、深さ70cmをはかり、ほぼ南北方向に流れる自然流路である。堆積状況から、砂礫が短期間に埋没した状況が窺われる。埋土から遺物の出土は無い。
- 柱穴** 直径15~20cmの柱穴が10基検出されたが、建物として繋まるものは無い。
- 第2遺構面** 黒色粘土をベースとする遺構面である。覆土からの遺物の出土はなく、時期を明確にできない。第1次調査で検出された第3遺構面と対応し、水田面である可能性があるが、畦畔等は確認できなかった。自然流路が2条検出された。
- 自然流路1** 第1遺構面の自然流路と1部共有しながら、西から南東へ屈曲して流れる自然河道が検出された。最下層より、弥生土器片が数点出土した。前期の壺の破片で、かなり磨滅している。
- 自然流路2** 北区で、北から南へ流れる自然流路が検出された。幅350cm以上、深さ80cmを測る。埋土より、弥生時代前期の土器片が数点出土した。
- 3. まとめ** 今回の調査区は西から東へ緩やかに傾斜しており、東側では遺構の存在が希薄である。第1次調査区においても、地形が東側に傾斜しており、西側に安定した遺構面が存在した。今回の調査区の西側にある第3次調査で、生活面が確認されており、当遺跡の主要部は第1次及び第2次調査区の西側に存在すると考えられる。
- 今回の調査では、遺構の検出数が少なく、出土遺物も流入した物であり、当遺跡の性格を明らかにする事はできなかったが、これまで検出された遺構から、居住域としてではなく、生産域もしくは墓域として利用されていた可能性が高い。層序の観察からも、安定した土壤が少なく、当遺跡の東端部であると考えられる。

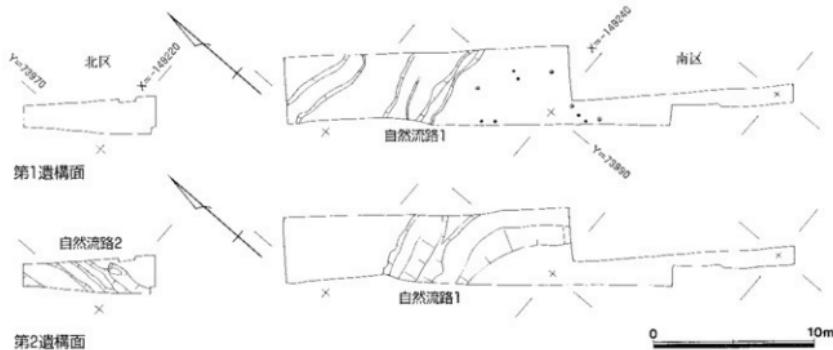


fig. 392 調査区平面図

ごんげんちょう 55. 権現町遺跡 第2次調査

1. はじめに

権現町遺跡でのこれまでの調査は、昭和63年（1988）に集合住宅建設に伴い、神戸市教育委員会が行った調査が第1次調査である。その時の調査では中世の集落跡が発見されている。今回の調査は第1次調査地点の、山陽電鉄の路線を挟んで北側に位置し、集合住宅の建設に伴うものである。



fig. 393
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

調査区の北側は現表土から50cm程で遺構面に到達するが、調査区の中央辺りから南側にかけては傾斜して下がり、現表土から最深部で1.8mで遺構面となった。調査区の南側に幅約1.5mのトレンチを設定して調査したところ、地形は傾斜して立ち上がる事が確認された。この結果から、調査区には東西方向の谷地形が走ることが判明した。

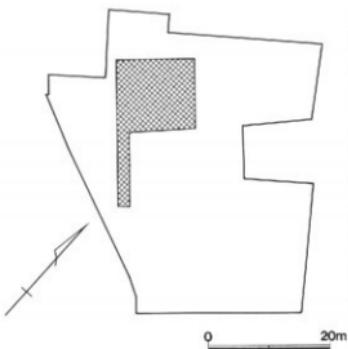


fig. 394 調査区設定図



fig. 395 調査区全景

- S E01** 谷地形の底部付近で見つかった S E01は素掘りの井戸と思われる。平面形は楕円形に近く、長径 3.2m、短径 2.4m、深さ 85cmで、逆三角形状に穿たれている。底部は凹凸があり、軟岩を穿っていた。須恵器、土師器片に混じって軒丸瓦の瓦当が出土した。遺物から判断して平安～鎌倉時代のものと考えられる。
- S K01** S K01は長径 70cm、短径 40cm、深さ 20cmで、傾斜面で見つかった土坑で、埋土より、砥石片が出土している。
- S K02** S K02は直径 80cm、深さ 8 cmの土坑で、底部から炭化物が出土した。土坑の用途は不明である。
- S D01** S D01は幅 80cmの浅い溝で、谷の方向に導水するように掘られている。
- S D02** S D02は幅 70cm、深さ 10cmの溝で、谷底で谷方向に沿うように流れる溝である。人工的なものではなく、自然の水道的なものと思われる。溝からは弥生時代と思われる土器の細片が出土している。
- ピット** ピットは数十個見つかったが、S P01から中世の須恵器片が出土したのみで、その他のピットから遺物は出土していない。ピットはまとまるものもなく、掘立柱建物等を構成するものは無いと思われる。

3. まとめ 今回の調査地は、遺跡の末端部に辺りと思われ、居住域等の集落の中心的な遺構の発見はされなかったが、第1次調査で確認されている、平安時代～鎌倉時代の集落の拡がりは明らかになったと思われる。また、S E01から出土した軒丸瓦は、近隣に瓦葺きの建物の存在を示唆するもので、特筆すべきであろう。

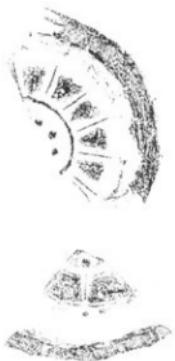


fig. 396 出土軒丸瓦拓本



fig. 397 調査区平面図

おおた ちょう 56. 大田町 遺跡 第9次調査

1. はじめに

大田町遺跡は須磨区大田町・戎町に所在する弥生時代～近世に至る複合遺跡で、妙法寺川により形成された自然堤防上に立地する。過去の調査では主に奈良～平安時代にかけての遺構・遺物が出土しており、神戸・明石幹線に平行する東西溝を軸に掘立柱建物が多数検出され、出土遺物には須恵器・土師器・黒色土器・瓦をはじめ縄縫・灰釉陶器が認められる。特に第3次調査では『荒田郡』銘をもつ円面鏡が出土しており、官衙施設（「須磨駅？」）とそれに伴う集落として認識されている。また下層では、第2次調査で古墳時代の土坑から滑石製品が約550点出土している他、第5次調査では弥生時代中期の竪穴式住居などの遺構が確認されており、北東に接する戎町遺跡との関連が注目される。

今回の調査地は妙法寺川左岸の現標高12～13m付近に位置する。平成7年度に行われた西の隣地で第7次調査では微高地の湿地状の堆積層に奈良～平安時代の遺物の混入が認められ、また道を隔てた南での第8次調査では掘立柱建物が検出されている。



fig. 398
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴い、基礎杭、地中梁設置及び駐車ピット部分により埋蔵文化財に影響を及ぼす部分を対象として実施した。調査区は1～8区を設定した。

調査区内の土層堆積状況は上から現代の盛土・近代水田耕土・近世旧耕土・土木が調査地全体で認められる。その下層についてはシルト層・砂層が不規則に堆積しており、水田土壤化している部分も認められる。これらの層が約50cm程あり、その下に黒灰色シルト（湿地状堆積）、青灰色極細砂（遺構面：T.P. 12.20～12.30m）が堆積する。1～5区と8区では工事影響深度の関係から主に暗灰色シルト層（上述の水田土壤）までが掘削対象となり、駐車ピット部分にあたる6・7区では青灰色極細砂層までの掘削を行った。

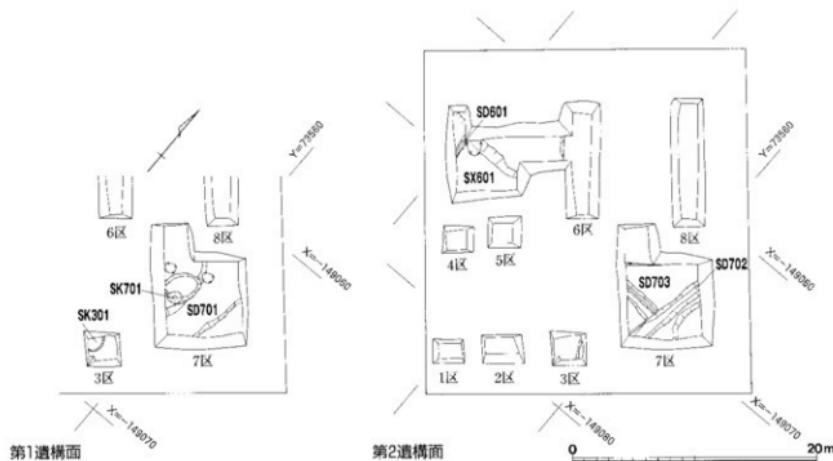


fig. 399 調査区平面図

1～5 区 暗灰色シルト層に奈良～平安時代までの遺物が含まれており、湿地堆積に遺物が混じるものと考えられる。隣地の第7次調査で確認された状況と同様である。

第1遺構面 3区では暗灰色シルト層の堆積がみられず、同一面と考えられる層位で濁暗茶褐色砂質土層が検出された。この面で拳大の石を詰め込んだ土坑(SK301)が検出された。土坑の深さは約20cmである。大半が調査区外に存在するため規模については不明である。他の調査区の状況から、濁暗茶褐色砂質土層自体が大きな溜まりの埋土となる可能性がある。中から奈良時代後半の須恵器壺の底部片が出土している。

6 区 南北約10m、東西約13mのH形の調査区である。調査区の内、東側の南北トレント部分のみ掘削深度は現地表下1.6mまでである。灰色シルト層を除去し、灰褐色砂質土層を検出した段階で遺構の精査を行ったが、遺構は確認されなかった。上述の1・2・4・5区と同様の状況である。

第2遺構面 調査区の西半では暗灰色シルト層の下層に青灰色細砂層、淡黒灰色シルト層、青灰色極細砂層の堆積が確認され、青灰色極細砂層面が西へ落ち込む状況が確認できた。この青灰色極細砂層面は後述する7区の第2遺構面に相当する。

SX601 上層の淡黒灰色シルト層は落ち込みの埋土で湿地状堆積にあたる。この層には奈良時代の遺物が流れ込みの状態ではあるが多く含まれている。東側落ち込み上部では遺構は確認されなかった。落ち込みは南西へ深くなり、調査地内での落ち込みの高低差は約30cmである。

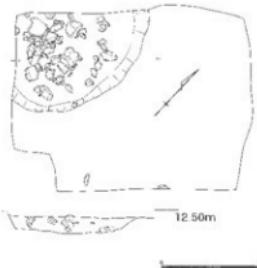


fig. 400 3区SK301平面図・断面図

ある。奈良時代後半の須恵器・土師器の他、径約1cmの球形の金銅製品が出土している。青灰色極細砂層以下の断ち割り調査を行ったが、下層は人頭大の礫を含む灰色粗砂混じりの礫層となり、洪水や土石流による氾濫の後、一帯はながらく湿地であったと考えられる。

7 区 調査地の南東の南北約9m、東西約7mの調査区である。遺構面が2面確認された。第1遺構面で土坑1基、落ち込み1基、溝1条、第2遺構面で溝2条を検出した。

第1遺構面 第1遺構面は3区で確認された濁暗茶褐色砂質土層及び暗青灰色砂質土層上面に形成された遺構面で、土坑1基、落ち込み1基、溝1条が検出された。

S K701 径約1m、深さ約50cmを測る。埋土は黒褐色シルト層である。拳大から子供の頭大の石が数個、上層から下層までの範囲で検出された。検出層位からすると3区のSK301と同様の遺構と考えられるが、石の入り方はやや異なり、意識的に投棄されたと考えるにはやや問題があろう。土師器の細片が出土した。

S X701 径約2m、深さ約20cmを測る。埋土は黄褐色シルトである。造構プラン検出時に牛と思われる獸齒が出土しており、造構埋没後に投棄された可能性がある。遺物は細片の須恵器・土師器が出土したのみである。

S D701 幅約5m、深さ約20cmで浅い落ち込み状を呈する。まとまった遺物は少なく、また検出時に明確なプランでなかったことから、微高地部の堆積層の一部と考えられる。

第2遺構面 7区の南東隅で青灰色極細砂層のやや安定したベース面が確認された。第8次調査で検出された掘立柱建物が建てられた面に続く微高地の端部と考えられる。調査区内の残りの部分は北西に向かい緩やかに傾斜する湿地状の地形となっている。微高地からの落ち際、

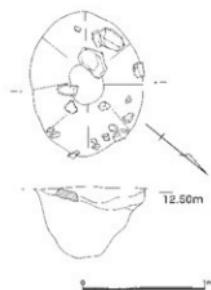
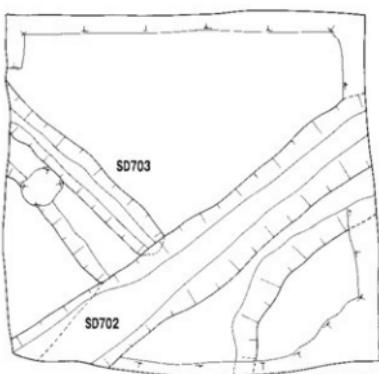
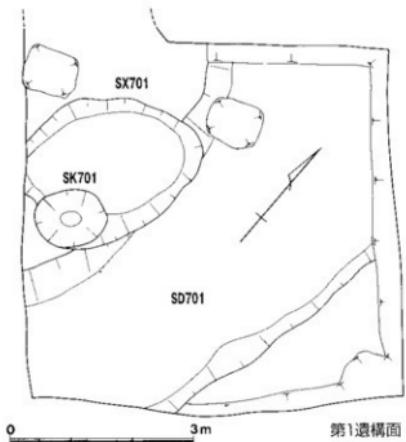


fig. 401
7区SK701平面図・断面図



傾斜部分で溝が2条検出された。

S D702 確認された微高地のラインに平行する溝で幅約1.5m、深さ約30cmを測る。埋土は暗灰色粘質土の單一層である。

S D703 S D702と交わる部分から須恵器の椀・皿・壺、土師器の皿・甕等がかたまた状態で出土した。時期は奈良時代後半である。

S D703 S D702に直交する溝で幅約1.5m、深さ約0.4mを測る。プラン検出時にはS D702に先行するものかと思われたが、埋土にほとんど違いがなく、微高地を取り巻き、湿地へ流れ込む一連の溝であったと推定される。

3. ま と め 今回の調査では土坑・溝といった遺構のみで建物は検出されなかったが、微高地の端部が確認され、その周辺においてはある程度の遺物が出土する状況が把握できた。先の第7・8次調査の状況とあわせると今回の調査地の南東側まで微高地が広がるようであり、一帯に遺構が存在する可能性が高くなった。湿地状の堆積層には奈良時代から平安時代に至る遺物が含まれており、湿地景観が比較的長期に渡り続いているものと推定される。さらにより上層においても安定した地盤は認められず、中世以降もその状況はあまり変化せずに、一時期水田として利用されていたにとどまるようである。

遺構から出土した遺物はいずれも奈良時代後半のものであり、近在の建物付近から投棄されたものと推定される。また今回の調査では古墳時代以前の遺物は確認されなかった。

これまでの調査により、妙法寺川に沿った自然堤防（微高地）の北西部分の位置がある程度復元でき、集落の北西～西の範囲が想定可能ではないかと考えられる。



fig. 403 6区遺構面全景



fig. 404 7区第2遺構面全景

57. 大田町遺跡 第10次調査

1. はじめに 大田町遺跡は、妙法寺川の東岸に形成された標高12m～14mの自然堤防上に立地している。

東側に隣接して存在している戎町遺跡が、主として、弥生時代～古墳時代にかけての遺構・遺物が検出されているのに対して、大田町遺跡では、奈良時代～平安時代にかけての遺構・遺物が多く認められる。



2. 調査の概要 N区は、東西15.0m、南北20.0mのL字形の調査区である。

N 区 基本層序は、盛土層、旧耕土層、旧床土層で、第4層～第6層が間層、第7層の灰褐色砂質土層（暗灰褐色砂質土層）が古墳時代後期～平安時代頃の遺物包含層となり以下、古墳時代前期～中期頃の遺物包含層である第8層を経て、第2遺構面の基盤層である第11層となる。第14層は、弥生時代中期～後期頃の遺物包含層で第15層の上面で第3遺構面となる。さらに、水田面を被覆する洪水砂層の第18層の下の第20層において弥生時代前期頃の遺物を含む水田基盤層となり第21層で黒灰色粘土層となっている。

第1遺構面 地表下約1.2m～1.6m（標高8.90m～9.20m）で、第7層上面に至る。第7層は、古墳時代後期～平安時代頃の須恵器・土師器を多量に含む遺物包含層である。

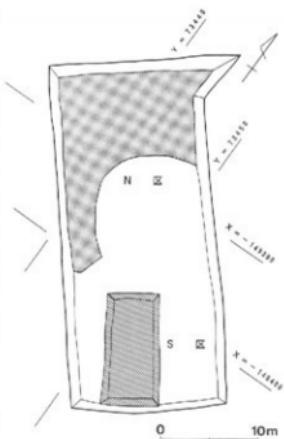


fig. 406 調査区設定図

周辺地の調査成果では、この上面で、奈良時代～平安時代頃の遺構が検出されているが、今回の調査区内では、遺構は確認できなかった。

第2遺構面 地表下約1.5m～1.7m（標高8.60m～9.00m）の暗褐色シルト層の上面で検出した弥生時代後期末～古墳時代前期初頭（庄内併行期）頃の遺構面である。

検出した遺構は、土坑2基、溝10条、ピット38か所である。

ピットは、いずれも直径20cm～50cm、深さ10cm～25cmを測るが、建物としてはまとまらなかった。

第3遺構面 地表下約1.5m～1.7m（標高8.60m～9.00m）の黄灰色シルト層の上面で検出した弥生時代中期～弥生時代後期頃の遺構面である。

検出した遺構は、土坑3基、溝1条、ピット48か所である。

ピットは、直径20cm～50cm、深さ10cm～25cmを測るが、建物としてはまとまらなかった。

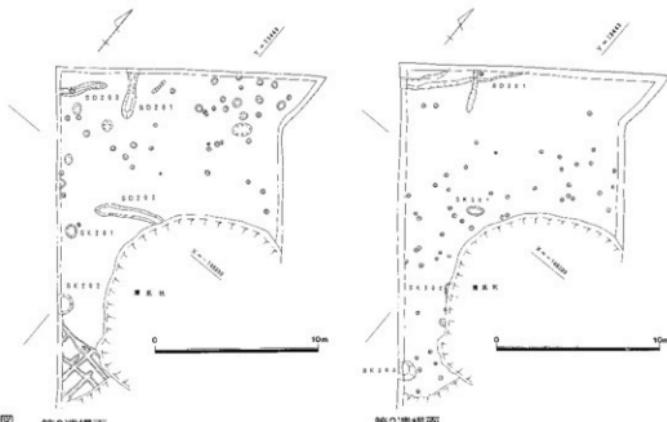


fig. 407

第2・3遺構面平面図 第2遺構面

第3遺構面

第4遺構面 地表下約2.0m～2.2m（標高8.20m～8.50m）の暗褐色粘質土層の上面で検出した弥生時代前期頃の遺構面である。

検出した遺構は、溝1条と水田址と考えられる畦畔状遺構である。

SD401は、調査区の北西隅で検出された東西方向にのびる溝状遺構で、調査区外にのびているため、全体の規模は不明であるが、全長4.5m以上、幅1.1m以上、深さ35cm以上を測る。

水田址と考えられる畦畔状遺構は、概ね、上端部の幅が10cm～30cm、下端部の幅が30cm～50cm、高さ10cm～15cmであるが、調査区東端の南北方向にのびる畦畔は、上端部の幅が50cm～70cm、下端部の幅が80cm～90cm、高さ10cm～20cmで、他の畦畔と比較すると、幅・高さともに、規模が大きくなっている。また、調査区南端の東西方向にのびる畦畔も、上端部の幅が20cm～30cm、下端部の幅が50cm～60cm、高さ10cm～15cmで、他の畦畔よりも若干はあるが、幅が広くなっている。これらの畦畔状遺構は、調査区北側及び西側にはのびているが、東側及び南側では途切れている。



fig. 408 第4遺構面全景



fig. 409 水面上遺物出土状況



fig. 410 第4遺構面平面図

駐畔状遺構は、十文字形に交差しており、駐畔に区画された部分は、ほぼ水平な面となっており、圃場面（田圃面）と考えられるが、今回の調査では、明瞭な足跡や稲株痕跡等は検出できなかった。

圃場面の一区画の規模が判明しているものは、4面でいずれも $5.0\text{m}^2 \sim 15\text{m}^2$ 程度の小区画の水田である。また圃場面は、北側から南側に向かって、若干低くなっている、北端と南端の圃場面のレベル差は、15cm~20cmを測る。

第4遺構面調査終了後、水田基盤層である暗褐色粘質土層を掘り下げている時に、弥生時代前期の壺形土器が1個体出土している。

第5遺構面 地表下約2.2m~2.5mの黒灰色粘土層の上面で検出した遺構面である。

遺構面上面及び遺構内から出土した遺物が小片のため、遺構及び遺構面の時期を確定することは、困難であるが、弥生時代前期よりも古く、縄文時代に遡る可能性も考えられる。検出した遺構は、溝状遺構2条、ピット3か所である。

S D501は、調査区北側で検出された東西方向にのびる溝状遺構で、全長11.0m以上、幅40cm~60cm、深さ10cm~20cmを測る。東側は、S D502と交差しており、西側は、調査区外にのびている。

S D502は、調査区東側で検出された南北方向にのびる溝状遺構で、全長6.5m以上、幅50cm~70cm、深さ10cm~15cmを測る。北側は、調査区外にのびており、南側は、搅乱に切られている。T字形にS D501と交差しているが、埋土の切り合い関係が認められな

かったため、ほぼ同時期に存在したものと考えられる。

溝底のレベルからみると、SD501は、SD502から分岐した後、東側から西側へと、また、SD502は、北側から南側へと流れていたと推定される。

ピットは、直径20cm～25cm、深さ5cm～10cmを測る。柱穴というよりは、杭穴と推定される。

下層の調査 調査区の中央付近に、東西5.0m×南北1.0mの断ち割りトレンチを1か所設定し、第5遺構面より50cm下層まで掘り下げたが、遺構・遺物は確認できなかった。

S 区 S区は、東西6.0m、南北11.0mの長方形の調査区である。

土層の堆積状況は、N区と異なり、遺物包含層は検出せず、S区の北方より流入したものと考えられるかなり磨滅した遺物が若干出土した。

むしろ、この堆積状況は平成9年12月に、兵庫県教育委員会が実施した試掘調査の層序と類似しており、N区で確認された遺構面はひろがらないと考えられる。

3. まとめ 今回の調査地は、大田町遺跡の南端に位置しているため、過去の調査例と比較すると、遺構・遺物の量は、若干少なめであった。

また、調査当初予想された奈良時代～平安時代の遺構が検出されなかった。しかしながら、弥生時代後期～古墳時代前期頃の遺構・遺物が多数検出されており、特に、溝状遺構等から出土した庄内併行期の一括遺物は、この地域における当時期の編年をしていく上において重要な資料となるであろう。

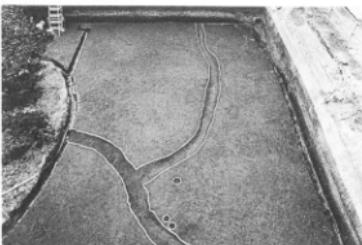


fig. 411 第5遺構面全景

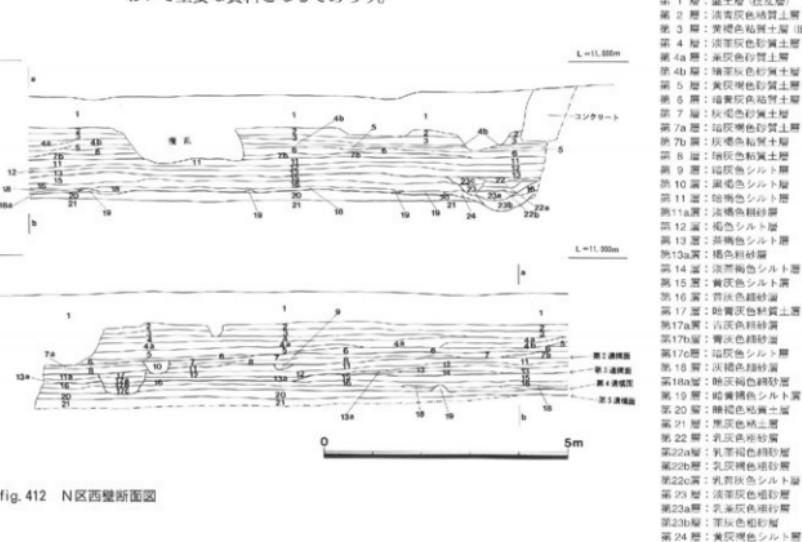


fig. 412 N区西壁断面図

58. 須磨天神町遺跡 第1次調査

1. はじめに

須磨天神町遺跡は、中央幹線（西須磨）街路築造工事に伴い1996年5月と1997年4月の3回にわたって実施された試掘調査により新たに発見された遺跡で、今年5月から本格的な発掘調査を開始している。遺跡の状況として、土器などの遺物を含む堆積層ではなく、遺構面の直上まで盛土であり、このことは、調査対象地全体にわたることが確認されている。したがって、現代までの搅乱也非常に多く、削平された遺構も少なくない。



fig. 413
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

第Ⅰ地区

調査地全体に遺構が確認されたが、現地表から50~80cmで遺構面に達するため近現代の搅乱も全体に多く残されていた。発見された遺構は13世紀代と近世代のものである。下層を調べるため一部を深く掘削して確認作業をおこなったが、さらに古い遺構・遺物は発見されなかった。

SD01 調査区西寄りにある南北方向の溝である。幅1m前後で、溝に西側肩部に約40cm間隔で杭が打たれていた。溝の中からは、大量の土器類が出土したほか獸骨も十数点出土している。土器は、13世紀代に属する須恵器・土師器・瓦器が中心で青磁・白磁などの輸入磁器はほとんど出土しなかった。第Ⅰ地区で出土した遺物の大半はこの溝からのものである。

SX15 径55cm、深さ25cmの円形の土坑に、東播系須恵器壺の胸部中位以下を欠き口縁部を下にして設置したものである。

SX16 径45cm、深さ15cmの円形の土坑に、土師質土器の羽釜の底を欠いて設置している。SX15とともに検出面直上まで盛土であったため、いずれの土坑も削平されているものと考えられ、複数個体であったかどうかはわからない。

S X17 径約70cm、深さ約65cmの円形の土坑に、S X16同様底を欠いた土師質土器の羽釜を設置し、その周囲を拳大から拳倍大の石で固定している。

以上3つの造構に似たものとして、羽釜の底を欠き、数段かさねて井戸枠とする例や井戸底の曲げ物のように水溜としている例が各地で発見されており、同様のものであろう。



fig. 414 第I地区遺構面全景



fig. 415 第I地区平面図



fig. 416 第I地区S X15・16

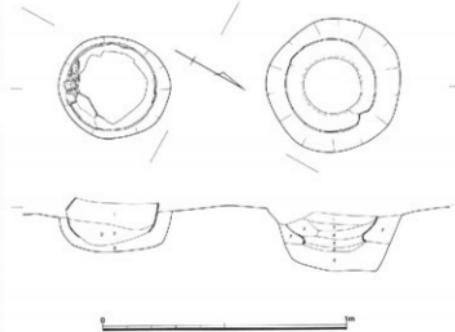


fig. 417 第I地区S X15・16平面図・断面図



fig. 418 第I地区S X17